青葉兵団（陸軍第202師団）の群馬県移駐

― 史料と遺跡から見た昭和20（1945）年本土決戦の一様相 ―

菊　池　　実

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに
１．関東の本土決戦計画
２．青葉兵団と片倉衷
３．片倉衷の「手帖」「備忘録」から
４．「手帖」「備忘録」からわかる事実
５．青葉兵団（第202師団）の布陣
６．部隊が移駐した学校の様相
７．復員業務と終戦業務
おわりに

―― 要　旨 ――

本土決戦下における本県の状況については、これまで詳細な分析は行われてこなかった。本土決戦計画そのものは、敗戦とともにすべて幻となってしまったために、それに備えて準備された様々な行動は歴史の中に埋没していったのである。このために戦争遺跡の中でも本土決戦に関わる遺跡の調査が近年注目されている。

今回、片倉衷の「日誌」と「備忘録」から、今まで不明であった県内移駐師団の実態と行動を把握し、あわせて部隊が布陣した県内各地や埼玉県下の国民学校の状況を集約してみた。部隊の移駐は昭和20年５月中旬以降、６月初旬にかけて実施された。鉄道沿線を中心に、当時の前橋市、高崎市、伊勢崎市、佐波郡５村、勢多郡１町・５村、碓氷郡２町・６村、群馬郡４町・17村、利根郡１町・６村、北甘楽郡２町・１村、多野郡２町３村におよんだ。現在の行政区域では６市３町３村（市－前橋・高崎・伊勢崎・沼田・渋川・安中、町－玉村・吉岡・甘楽、村－榛東・昭和・川場）となり、北は川場村から南は高崎市新町、東は伊勢崎市から西は安中市まで、そして埼玉県下の児玉郡１町・８村（現本庄市・上里町）、大里郡６村（現深谷市・寄居町）の広範囲であった。さらに国民学校で見ると、前橋市２校、伊勢崎市４校、佐波郡５校、勢多郡10校、碓氷郡８校、群馬郡24校、利根郡７校、北甘楽郡３校、多野郡５校の計68校、さらに県立学校２校におよんだ。このために学校は午前と午後に分かれた二部授業や分散授業を実施せざるを得なかった。学校はその教育機能をほとんど失ってしまった。

本土決戦に関わる県内の遺跡としてはどのような遺構が想定され、そして現在に残されているのであろうか。まず遺構として想定されるのが、学校の校庭や周辺に構築された人馬用の防空壕、炊事場、浴場、訓練用のタコツボ、さらに三角兵舎や洞窟兵舎であろう。ただし、今回は紙幅の関係から史料分析を優先させ、関連遺跡についての調査成果は別稿を準備する予定である。

キーワード
対象時代　近現代
対象地域　群馬・埼玉
研究対象　本土決戦・関連遺跡
　　片倉衷文書　学校史

はじめに

本土決戦下における本県の状況については、これまで詳細な分析は行われてこなかった。一般的な認識としては、昭和49（1974）年に刊行された『群馬県復員援護史』の中の記述、「本土決戦場が沿岸に求められた関係で本県は、軍の作戦配備上では後方機関が配置され各種補給廠が展開し、軍需生産、物資供給基地となった」、「長野、新潟に通じる裏日本の交通要路にあり、後方基地として、部隊の配置、物資資材の集積、決戦部隊の支援補給のため重要であった」[1)]、といったところであろう。そして本土決戦計画そのものは、敗戦とともにすべて幻となってしまったために、それに備えて準備された様々な行動は歴史の中に埋没していったのである。

本稿は、県内に布陣した決戦師団のひとつ青葉兵団（兵団とは通常、旅団と師団を指す）の動向を追いながら、本土決戦下の群馬、とりわけ部隊の移駐した国民学校の状況を浮き彫りにし、そして現在までに残る関連遺跡の状況把握を行うものである。ただし、今回は紙幅の関係から史料分析を優先させ、関連遺跡についての調査成果は別稿を準備する予定である。

１．関東の本土決戦計画

昭和20年に入ると陸軍は、この年の９月以降九州に、関東地方には次の年の春ごろ、連合軍の本土進攻が確実なものと判断し、本土の兵備に着手するとともに、本土決戦の計画策定の準備促進がなされた。この作戦計画は３月中旬に策定を終り、「決号作戦準備要綱」と呼ばれた。本土防衛のために新設する兵団として、一般師団40個、混成旅団22個など、総計約150万人に達する膨大な兵力の動員、いわゆる根こそぎ動員が３次にわたって実施された。２月28日の第１次兵備（沿岸配備の16個師団の動員）、４月２日の第２次兵備（機動攻撃に任ずる８個師団の動員）、５月23日の第３次兵備（19個師団の動員）である[2)]。

４月、第１総軍、第２総軍、航空総軍が創設され本土決戦態勢の骨幹が概成した。関東地方では、第１総軍、第12方面軍隷下（隷下とは、恒常的に指揮・命令をうけること）として米軍の上陸作戦（コロネット作戦・1946年３月１日実施予定）に備えていたのは、鹿島灘を防禦する第51軍（師団３、独立混成旅団２、独立戦車旅団１）、九十九里浜を防禦する第52軍（師団４、独立戦車旅団１、戦車連隊１）、相模湾周辺を防禦する第53軍（師団３、独立混成旅団１、独立戦車旅団１）、そして米軍の上陸地に向かって展開する予定で関東平野の内陸部に置かれた第36軍（表１）であった。

第36軍の作戦準備は、訓練を主として築城と交通路の設備にあたり、応急新編成の200単位師団は訓練装備の充実に努めていた[3)]。しかし、空襲の激化に伴う軍需品の生産低下、交通の逼迫、燃料食料の不足などに基因して、作戦準備の実質的内容、とくに部隊の装備と訓練と後方準備とは著しく遅滞していた。

表１

第 36 軍司令部（富士部隊）	軍司令官　中将　上村利通　浦和市
第 81 師団（納部隊）	師団長　中将　古賀　健　茨城県西部
第 93 師団（決部隊）	師団長　中将　山本三男　千葉県西北部　柏
第 201 師団（武蔵部隊）	師団長　少将　重信吉固　東京市西北地区　国立
第 202 師団（青葉部隊）	師団長　少将　片倉　衷　前橋付近　高崎
第 209 師団（加越部隊）	師団長　少将　久米精一　富山付近
第 214 師団（常磐部隊）	師団長　中将　山本英刀　那須野ヶ原　宇都宮
戦車第 1 師団（拓部隊）	師団長　中将　細見惟男　栃木付近　佐野
戦車第 4 師団（鋼部隊）	師団長　中将　名倉　栞　千葉市付近

２．青葉兵団と片倉衷

昭和20年４月２日、軍令陸甲第61号[4)]をもって野戦師団８個の臨時動員が発令され200台番号が与えられた。第36軍隷下の第201、第202、第209、第214などである。

師団長の補職は４月30日、方面軍（軍）戦闘序列編入は５月10日、動員完結の時期は、師団司令部、連隊本部などは４月30日、残部は６月10日である。兵器勤務隊、衛生隊、野戦病院、病馬廠は６月10日までに臨時動員を計画すると軍令に示された。その後６月４日に第４野戦病院、７月20日に兵器勤務隊の臨時動員が発令されたが、その他は未発令で敗戦となった[5)]。

最後の陸軍省人事局長であった額田坦の回想録の中に「敵の上陸部隊を撃砕するため精強なる師団八個と混成旅団十五個を新設することとなり、師団長には(新補職とせず、適任の少将を充当)新進気鋭、胆智充溢せる桜井徳太郎（30－陸士卒業期、以下同)、重信吉固（27)、片倉衷（31)、久米精一（31）等の勇将を揃え、参謀長と各部長とを欠く編制で師団長の軽快、縦横なる活躍が期待された。混成旅団長をはじめ、各級部隊長以下もまた同様の趣旨で厳選され、名実ともに必勝部隊が成立し、着々猛訓練が進んだが、間もなく終戦を迎えその威力を発揮する機会はついに得られなかった。」[6)]と言う一方、「部隊の編成にあたり、高級指揮官以下の指揮官の不足がはなはだしく、軍司令官、師団長、参謀要員など多数が外地から召還され、予備役の起用も行なわれた。また、師団長の一部には少将が充てられ、連隊長に中、少佐を充当せざるを得ない状況であった」[7)]というように実は多くの問題があった。軍令の規定では、約３分の１は既教育兵を充用し、また200台番号の機動打撃師団ではなるべく素質の良い兵員を充当することとされたが、戦争末期の大動員となっては多数の未教育兵や老兵が含まれていた。河辺参謀次長の日誌には、「新部隊の多造、改変の頻繁なるこのときに已むを得ない点も多々あろうが、適材の取得容易ならず、素質の劣化を免れず、陸士

卒業後二年以内で中隊長、四年以内で大隊長、無数の将官、猫も杓子も師団長となる」と慨嘆されている[8)]。

ところで第202師団長に補せられた片倉衷の略歴は以下のとおりである。

明治31（1898）年～平成３（1991）年。陸士31期、陸大40期。「中村大尉事件」[9)]の中村震太郎大尉とは、陸士31期の同期生であり、陸軍大学校もまた同窓の卒業生である。さらに陸大同窓には長勇（後の沖縄守備軍(第32軍)参謀長）もいた。昭和５（1930）年関東軍幕僚付として板垣征四郎高級参謀の補佐業務の一部を担任、また陸大在学中の兵学教官であった石原莞爾作戦参謀からの薫陶の機会にもめぐまれた。以後、満州国の建国運営に深く関与することになる。７年第12師団参謀、８年参謀本部第２部第４課第４班に勤務、９年陸軍省軍務局付。そして11年２・26事件の朝、片倉は叛乱軍鎮撫のため、三重の警戒線を突破して陸相官邸の前まで辿りついたが、叛乱軍の首謀者磯辺浅一元１等主計に銃撃される。事件後、陸軍省軍務局軍務課員に転属。12年関東軍参謀、関東軍第４課長として満州国の内面指導に辣腕を発揮。14年歩兵第53連隊長、15年参謀本部付、16年関東防衛軍高級参謀、17年第15軍参謀、18年ビルマ方面軍参謀、19年陸軍少将に進級して第33軍参謀長。そしてビルマ戦線から帰国して下志津教導飛行師団長に転補され更に一時歩兵学校付となった昭和20年４月、前橋に新設移駐された第202師団長に補せられた[10)]。片倉47歳の時であった。

師団は歩兵連隊３、山砲兵連隊１、迫撃連隊１、速射砲隊、機関砲隊、工兵隊、通信隊、輜重隊、兵器勤務隊、第４野戦病院から編成され（表２）、総兵員数は昭和20年８月15日現在、２万3144名であった。

表２

第202師団（青葉ー兵団文字符）少将　片倉　衷			青葉30401部隊	
部隊	指揮官	編成地	移駐先	部隊通称号
師団司令部		仙台	前橋市	青葉30402部隊
歩兵第504連隊	菅野善吉中佐	仙台	伊勢崎市	30403
歩兵第505連隊	中山佐武郎中佐	会津若松	碓氷郡安中町	30404
歩兵第506連隊	工藤鉄太郎中佐	山形	埼玉県本庄町	30405
山砲兵第202連隊	齋藤　武少佐	仙台	群馬郡箕輪町	22871
迫撃第202連隊	楢崎五郎中佐	仙台	利根郡沼田町	30406
師団速射砲隊	浜田信太郎少佐	山形	北甘楽郡福島町	30407
師団機関砲隊	平田孝太郎大尉	弘前	群馬郡京ヶ島村	30408
師団工兵隊	宮瀬　泰少佐	仙台	多野郡新町	30409
師団通信隊	池田照彦少佐	仙台	勢多郡桂萱村	30410
師団輜重隊	沢田熊衛少佐	仙台	群馬郡渋川町	30411
師団兵器勤務隊	本田熊次大尉	仙台	前橋市	30412　21415
師団第４野戦病院	高橋伊一郎軍医少佐	山形	勢多郡芳賀村	30416　21419
迫撃砲第８大隊	第３次兵備	沼田	利根郡沼田町	富士36376
迫撃砲第９大隊	〃	沼田	利根郡沼田町	富士36377
制毒隊、衛生隊、第１・第２野戦病院、病馬廠は終戦時未動員				

決戦兵団として随時所要の方面への転進を準備し、敵の進攻に際しては迅速にその主攻勢方面に進出して攻勢に転じ該方面の守備兵団とともに敵の上陸初頭において撃滅する任務を負っていた[11)]。しかし第202師団をはじめ新設部隊の装備充足状況（昭和20年５月16日現在）は、惨憺たるものであった。九州、四国以外の方面では第１次兵備、第２次兵備ともに、銃剣は師団当り約4000不足、拳銃は師団当り約400不足（３分の２欠数)、機関短銃は師団当り188不足（３分の２欠数)、47粍速射砲と12糎迫撃砲は相当の欠数があった。全般に最も不足していたのは、自動車、輜重車、中型以上の無線機、銃剣である。その対策として輸送力は牽引車により遊休車を牽引、小型無線の活用、そして銃剣については軍管区で自活できるように研究中であったという[12)]。

３．片倉衷の「手帖」「備忘録」から

昭和19年12月12日から20年４月15日までの下志津教導飛行師団長時代の手帖１冊（以下「手帖１」とする）と昭和20年１月１日から11月11日までの手帖１冊（以下「手帖２」とする)、「昭和20年５月　皇土決戦　決勝準備　備忘録　青葉兵団長」（以下「備忘録」とする）が国立国会図書館憲政資料室に「片倉衷文書」の一部として所蔵されている。これら３冊から師団の編成された昭和20年４月以降、敗戦後に至までの７ヶ月間の動向を追ってみたい。ただし、いずれの手帖類も鉛筆、ペン、毛筆を使用して、ほとんどメモに近い内容を書きなぐり状態で記したもので、さらに軍隊符号も随所に見られるため判読が極めて困難である。誤読があるかもしれないことをお断りしておきたい。

まず「手帖２」から毎日の行動を抽出する。次に「備忘録」から該当月のメモを確認する。「手帖２」には記されていない司令部職員からの報告内容、団隊長会報の内容、部隊の状況などが記されているからである。しかしこれについても余りにも簡潔なために、その内容を理解することは容易ではない。以上のことを踏まえたうえで毎日の行動を月毎にまとめてみよう。なお、〔　〕内と各月の末尾の※は筆者の注、□は不明文字である。

昭和20年4月「手帖2」から

15日(日)8.50内報／24(火)東條大将／26日(木)内報202D長〔D長とは師団長のこと〕※20日大本営陸軍部「国土決戦教令」配布

同　5月

五月(青葉)、青葉城下　青葉兵団／２日(水)出発9.40～20.00仙台／３日(木)11h〔午前11時〕司令部職員　13.30報告各部／５日(土)504i〔iは歩兵連隊〕　DTL〔DTLは師団通信隊〕午前／７日(日)山形初度巡視8.20-11.41　506〔歩兵第506連隊〕／９日(水)会津初度巡視〔歩兵第505連隊〕／10日(木)11h部内会報　18.00軍司令部偕行社／12日(土)戦闘□訓／15・16日会議／15日(火)弘前初度巡視〔棒線が引かれている〕

／16日(水)杉山元帥〔第１総軍総司令官の杉山元陸軍元帥〕／19日(土)団隊長会報〔この日、団隊長会同席上で師団長訓示が行われた〕／21日(月)8.25-19.40青森／22日(火)弘前初度巡視10.30-11.50／23日(水)石原中将〔棒線が引かれている、予備役陸軍中将・石原莞爾〕／24日(木)義烈空挺奥山道朗大イ／28・29日中隊長教育／30日(水)〔この日、青葉兵団教育練成に関する指示が通達された〕／31日(木)10.47～12.30浦和〔浦和には第36軍司令部がある〕※７日ドイツ無条件降伏、22日「戦時教育令」公布

同　6月

５日(火)宮崎〔宮崎周一参謀本部作戦部長〕／６日(水)仙台504i〔歩兵第504連隊〕／７日(木)504i　仙台／８日(金)山形／９日(土)若松／10日(土)若松／11日～16日第二次初度巡視　軍司令部・師団司令部／11日(月)仙台／12日(火)盛岡／13日(水)青森／14日(木)BA山田の〔BAは山砲隊〕　弘前MA〔機関砲隊〕／15日(金)山形／16日(土)速射〔速射砲隊〕17.36着部　仙台／17日(日)504i　仙台／19・20日出発〔片倉の履歴書では15日仙台出発、16日前橋着となっている[13]〕／19日(火)軍旗親授式／20日(水)長中将〔沖縄第32軍参謀長〕／21日(木)県庁、前橋／22日(金)連隊区、市長／23日(土)知事／24日(日)師団司令部14.00／25日(月)桂萱、渋川 DT〔師団輜重隊〕、通信巡視◎　招待18h／27日～29日作戦研究／27日(水)本庄／28日(木)504i〔棒線が引かれている〕午前◎／29日～７月１日後方主任研究／29日(金)505i〔棒線が引かれている〕／30日～７月２日軍司巡視／30日(土)伊勢崎504i　※22日「国民義勇兵役法」公布、23日沖縄守備軍組織的戦闘終結

同　7月

１日(日)本庄　506i／２日(月)505i／３日(火)10.30部長会報／４日～７日団隊長図上戦術／４日(水)5.30知事、市長／８日(日)MA〔機関砲隊〕4FL〔第4野戦病院〕兵勤〔兵器勤務隊〕／９日(月)9.00訓示　宇都宮／10日～13日司演富士演習〔第36軍司令部演習〕／10日(火)南大将〔南次郎予備役陸軍大将のこと、片倉とは姻戚関係にあたる〕浦和／11日(水)10h歩兵連隊本部　浦和／12日(木)浦和／13日(金)伊勢崎／15日(日)移動　工兵　速射砲／16日(月)山砲隊　前橋／17日(火)沼田／18日(水)部長会報10.00　19日(木)伊香保T〔輜重隊〕／20日(金)8.00司令部　P〔工兵隊〕10-11.30ヒル 504i14.00-16.30　MA〔機関砲隊〕19.30-21.50　前橋／21日(土)506i　前橋伊勢崎／22日(日)TL〔通信隊〕15-16.30 BA〔山砲隊〕18-21.00　前橋／23日(月)505i 9-13.00 TA〔速射砲隊〕13.00-13.50　MM〔中迫撃砲隊〕沼田／24日(火)９-11.30　MM　前橋／25日(水)部長会報　宮崎中将　前橋／26・27日軍司令部初度巡視／26日(木)軍司令部　前橋／27日(金)沼田／28日(土)沼田　前橋／30日(月)505i検閲　前橋／31日(火)10h部長会報　前橋※26日対日ポツダム宣言発表

同　8月

１日(水)車　金子／２日(木)船橋　東京／３日(金)前橋／４日～８日研究演習／４日(土)午前講話　前橋／５日(日)前橋空襲　船橋／７日(火)田中大将〔田中静壹第12方面軍司令官〕東金／８日(水)船橋／９日(木)蘇対日参戦　皇国危急　中央余裕ナシ／10日(金)団隊長集合11h 14h水馬演習／12日打電11.12H〔第11・12方面軍〕36A〔第36軍〕　意見具申／14日(火)本庄伊勢崎　B29伊勢崎／15日(水)訓示　12hラジオ大詔渙発／16日(木)兵団長会同〔棒線が引かれている〕浦和　東京／17日～20日訓話／18日(土)伊勢崎新町本庄小幡／19日(日)安中京島箕輪沼田／20日(月)沼田渋川前橋／22日(水)東條　省部〔陸軍省・参謀本部〕／24日(金)15h知事　田中大将自決／25・26日米兵進駐／28日(火)506〔歩兵第506連隊〕／29日(水)MA〔機関砲隊〕　504〔歩兵第504連隊〕／30日(木)BA〔山砲隊〕　505〔歩兵第505連隊〕　マックアーサー厚木到着／31日(金)TA〔速射砲隊〕在郷軍人会解散　※６日広島に原爆投下、８日ソ連対日参戦、15日玉音放送、終戦

同　9月

１日(土)T〔輜重隊〕 MM〔中迫撃砲隊〕　沼田／２日(日)降伏　DTL〔師団通信隊〕　8MM復員／４日(火)米兵県着／５日(水)幡、富士〔幡は第12方面軍、富士は第36軍〕／６日(木)9MM復員／７日(金)11h30司令部将校全員12h会食／10日(月)沼田／11日(火)東條大将自決□□／13日(木)大本営廃止予定　杉山元帥自決　小泉軍医中将自決／14日(金)吉本大将自決／16日(日)D除隊　召集解除／20日(木)大部復員完結／21・22日軍需品検査　※２日米艦ミズーリにおいて降伏文書調印

同　10月

９日(火)会報富士／10日(水)復員予定／11日(木)部隊長会食予定／15(月)沼田／16日(火)前橋

４.「手帳」「備忘録」からわかる事実

「手帖２」から関連項目の抽出を行ったが、さらに「備忘録」を参考にして群馬県移駐前と移駐後の状況を把握する。

移駐前の状況

片倉の下志津教導飛行師団長の職は４月15日まで、26日の内報は第202師団長の補職である。「手帖１」には４月２日の軍令陸甲第61号が記されていた。

航空から地上への移動について、片倉は後に次のように語っている。

> 四月十五日神武天皇祭の前に航空で東京で会議があった、全部の。そこへ行ったらぼくは航空を替っているんだよ。航空をおろされて特攻地上部隊要員として先づ歩兵学校付きね。私は。それですぐ航空総監のところに行ってその時阿南さんは替って航空総監は河辺正三。ビルマから帰った。「なってない、航空総監は。私がせっかく努力してこうやってやろうとしているのに、それを替えるのがあるか。私はもう軍人を辞める。民間で日蓮となって啓蒙運動をやるから辞めさせてくれ」。それから今度は四月二十二日参謀本部に行って参謀次長河辺虎四郎のところへ行ってこれにもまた言ったんです。それから軍務局長の吉積さん、宮崎第一部長等のところに行って言ったんですよ。(中略)「もうぼくは辞めるから軍人は。」、「そう言わんでやってくれ」、それで四月二十六日二〇二師団長の内命を受けたのです。「地上でやってくれ。少将で師団長やるんだから、特攻師団だから今度はやってくれ」、「冗談ぬかすな。人をだまして航空でしっかりやれって、何ごとだ」と

言って、結局は今度は第二〇二師団長拝命になったんですよ。」[14]

ひと悶着、ふた悶着あったことがわかる。24日は用賀にいた東條英機陸軍大将を訪問して「極秘　戦争指導緊急方策案」を閲覧に供している。東條が関東軍参謀長時代、片倉は関東軍第４課長でありよく知っていた関係であった。

５月に入り師団の編成された仙台に出発。３日、師団司令部職員に執務上の意図を開示、午後からは兵器部・経理部・軍医部・獣医部といった師団各部の報告を受けている。

「備忘録」によると、このとき参謀の栗城時男中佐から装備充実予定の概況についての報告が行われた。小銃は８月、火砲は秋までに３分の２充足、有線器材は秋までに５分の１、無線器材は８月までに３分の２充足、器具は８月までに全数、□□馬具は本年末までに２分の１充足、という師団の実態である。さらに兵器部の吉田大尉からは兵技准尉の不足、経理部の後藤少佐からは将校の欠員６、建技下士官１不足、下士16名予備役、軍資金は288万円、３ヶ月分、自活、経理勤務の３分の２は朝鮮人であること、軍医部からは胸部疾患と健兵保育、計画動員部隊についての報告、獣医部からは獣医資材の未交付、集合教育の件、馬の機動力の向上、調教、訓練、自活などについてであった。

５日から22日にかけて歩兵第504連隊(編成地・仙台)、師団通信隊(同・仙台)、歩兵第506連隊(同・山形)、歩兵第505連隊(同・会津若松)、機関砲隊（同・弘前）などの各部隊の初度巡視を実施している。その結果、たとえば通信隊で見ると、現役将校は６分の１、馬の素質不良、兵器資材なし、被服、鉄帽３分の１欠、編成上医官並獣医務下士官の充員なし、また歩兵第504連隊では充足の将校84名のうち現役は11名、中隊長では現役なし、というものであった。このために６日、人事局長に人馬の素質、士官候補生配属考慮、兵器資材、将校下士官兵を通する編入（以上「備忘録」による）の申し入れが行われている。このように隷下諸部隊の大部を視察して概ねその現況を把握、錬成の方針を指示することになった。

10日、師団は第36軍（司令部は浦和の埼玉師範学校）の戦闘序列に編入された。

この日、内地防衛のために満州から転進してきた独立工兵第27連隊の将校２人は、赤城山麓が地形的に連隊の特殊訓練に適し秘密保持にも良好だとして、前橋市に急行。前橋警察署で下田署長に会って種々問い合わせ、更に富士見村に急行し、古屋村長に会って状況を確認している。第36軍からは、同地区は既に第202師団の展開予定地域であるので、同師団が了承すれば結構であるとの回答があり、連隊長は仙台に急行。同師団と調整した結果、連隊の富士見村地区の使用に快諾を得、５月下旬勢多郡富士見村・南橘村各国民学校に集結した[15]、とあるように第12方面軍隷下のもう一つの部隊が群馬に展開することになった。

ところで、青葉兵団の移駐時期について自治体史や学校誌の中には、それを19年９月[16]や20年正月頃[17]、あるいは４月[18]、より具体例としては２月４日[19]、４月20日[20]、５月９日[21]の記載が認められるものもある。しかし「備忘録」によれば、転営準備の内示を５月10日の部内（師団司令部の各部）会報で、翌日には栗城参謀が移駐準備を開始、市街地を避けることや山砲隊の掌握命令、資材や馬の爆撃対策、地方側招待などの記載、18日には各部長に対して現地自活、洞窟三角兵舎、準備迫撃砲の記載があることから、先遣隊の派遣を含めた移駐開始の時期はこれ以後のこととなろう。実際には５月10日～16日にかけて県内外の関係市町村にたいして部隊の移駐が知らされたようである[22]。続いて「備忘録」の25日には新駐地配宿や移駐と防空、軍旗拝受の幕僚派遣などの記載が見られる。この時期の「備忘録」には各部隊の編成装備の充実予定や移駐に関するもの、また作戦準備に関するメモが主体となっている。

なお、19日の団隊長会同席上での師団長訓示は次の５項目からなっていた。一・統率、二・軍紀について、三・編成装備充実と資材の徹底的愛護、四・教育訓練即作戦準備、五・服務および内務である。この中で兵員の素質を「郷土的特質ニ基ク沈毅質実素朴隠忍持久ノ美点ヲ有スル反面敏速溌剌周密等ニ於テ欠陥ヲ有ス」と指摘、編成装備の充実は兵団焦眉の急務であること、作戦準備には資材の集積、交通築城施設などの事項を包含することなどの指摘があり、そして最後はこう結ばれていた。「戦場内務ノ躾ヲ適正ナラシメ苟モ戦陣生活ニ於テ安逸ヲ貪リ若クハ一般同胞ノ指弾ヲ招クガ如キ悪徳行為ノ根絶ヲ期スベシ」[23]。これは内部で悪徳行為が横行していたことの裏付けでもあろう。

また５月30日には訓練速成の基準を指示している[24]。それによると６月10日から11月30日までを前中後の３期に分け、前期を６月10日から７月20日まで兵の基礎訓練を主体、中期は７月21日から８月31日まで前期の課目、中隊の訓練、歩砲兵大隊の指揮戦闘の訓練、下級幹部の指揮能力の向上、後期は９月１日から11月30日まで前中期の課目、大隊以上の訓練、そして各部隊は各期をとおして対化学戦教育を実施するものであった。

熾烈な砲爆撃と強力な戦車を伴う米軍橋頭堡陣地に対し果敢なる攻勢をとりこれを海岸に圧倒撃滅する、このための戦闘訓練の主眼のひとつ対戦車戦闘では各隊肉攻教育が行われ、また対空戦闘では損耗減少のために遮蔽と分散分置、掩護が重要視された。そして煙利用が検討されている。昼夜規模種類に応じ利用目的を確立して活

用、となっておりこれは毒ガス戦を想定したものであろうか。

６月に入って、５日に参謀本部作戦部長の宮崎周一中将と会見している。宮崎中将の「作戦秘録　下」[25]の６月５日の項には、「一、片倉少将　１．機動師団の若さの問題　２．爆弾(大型匍匐用)　３．沿岸配備兵団と機動兵団との用法」と記載されており、その会見内容が知られる。すなわち機動師団といいながらも老兵の多さ、肉弾攻撃用の爆弾、兵団の用法についてなどであろう。翌日から仙台・山形・若松の部隊を巡り、11日からは第36軍司令部と師団司令部による第２次初度巡視のために仙台・盛岡・青森・弘前・山形の各部隊を回っている。また11日、師団の各部から次の報告が行われた。獣医部では下士官・蹄鉄工29名欠、工兵は過員、馬1288頭のうち1236頭充足、栄養面50パーセント、現地自活の件、軍医部からは衛生部将校、衛生材料について、経理部からは人員、糧食、日用品、被服、鉄兜について、兵器部からは機関短銃、中迫撃砲、馬と車、火焔発射器、兵器収集利用の件、などである。

移駐後の状況

そしていよいよ６月19日から20日、群馬に向けて移動を開始した。出発に先立って連隊旗の親授式が行われている。この頃、沖縄では住民の大きな犠牲とともに日本軍の組織的戦闘が既に終り、23日未明に牛島第32軍司令官および陸大の同窓であった長参謀長は自決をとげている。

移駐に先立って、６月２日に歩兵第504連隊先遣隊が佐波郡豊受村国民学校へ、歩兵第505連隊先遣隊が碓氷郡磯部町国民学校や群馬郡里見村国民学校へ、歩兵第506連隊先遣隊が埼玉県本庄町国民学校へ到着、本隊の受け入れ準備にあたっている。また翌３日には副官の市村少佐が前橋市城東国民学校に校舎の使用について来校した。

各部隊の移駐完了は20日以降である。そして片倉は21日から23日にかけて、県庁や前橋連隊区、県知事や前橋市長を訪問している。25日になって桂萱に移駐した通信隊、渋川に移駐した輜重隊の巡視が行われ、同日午後６時から地方側招待が行われた。30日から７月２日にかけて軍司令部の巡視が行われ、伊勢崎に移駐した歩兵第504連隊の巡視は30日に行われた。

「備忘録」の21日には「ロタ砲　移動修理班ノ活動兵器勤務隊長　対戦車　煙利用　俘虜調査　蚊帳交付援農方策　栄養失調　給養額　不軍紀　食糧保存法　乾燥食ノ研究」などの記載があり、また25日の巡視の結果、通信隊と輜重隊については次のように記載している。まず通信隊については「燈火管制　横穴ト湿潤対策　哨兵数　銃架　小部隊引率　不具又ハ個癖者処遇身上調査分散ト監視」であり、輜重隊については「居住施設　水道　便所ト児童峻別　防空的厩舎　燈火管制　営内区分通行証　哨兵防空壕　炊事煙突　師団調弁　倉庫給与自活ノ程度　様式ノ決定指示　外出　援農援諭ト指揮防空指針」などであった。

上記のロタ砲とは、試製４式７糎墳進砲のことで、携帯式の対戦車ロケットランチャーのことである。ロケットのロと対戦車弾のタを取ってロタ砲と呼ばれた。対戦車戦闘が重視されていたことがわかる。また「便所ト児童峻別」などは国民学校の校舎が兵舎として使用されたことを端的に物語っている。

27日の部長会報には次のメモがある。「自給食物品目野戦病院関係準備ト住宅　煙利用　夜尿症兵卒治療診断経理勤務（鮮人）充足　移動修理班ノ活用　木炭車ノ改造(薪車)　洞窟兵舎施設　三角兵舎施設　相馬原附近ヘ作ル」などである。そして歩兵第504・505連隊については「民家出入禁　町ヘ出サヌ　逃亡　部隊防止－報告対策確立　軍中逃亡　私的制裁ノ根絶　煙利用」などが記載されている。ここにおいて部隊から逃亡兵がでたことは、上層部にとって衝撃的なことであったろう。

７月に入ると師団の図上戦術や演習、県内移駐部隊の巡視や検閲が頻繁に行われている。１日は本庄の歩兵第506連隊、２日には安中の歩兵第505連隊の視察、８日は京ヶ島の機関砲隊、そして新たに第４野戦病院と兵器勤務隊の視察が行われた。１日の「備忘録」には次の記載がある。「505　中隊分離　厩ノ観念　兵ノ蓆　援農水ノ炊事場　炊事　経理　　P　引率　服装　指揮　上履　防空壕意義　分屯　輸送　作戦訓練　馬匹管理　兵寮　504i逃亡　後発整理　命令　D交通隊　P三中　四小　四分隊　食事　遮蔽　工事ノ敏速　経理勤務隊ノ行動　躾　戦術講堂準備」などである。

部長会報は３日、18日、25日、31日の４回行われた。７日の団隊長図上戦術においては、１教育練成と研究、２戦略展開について、そして各団隊長からは次の報告（表３、□は不明文字）が行われた模様である。

表３

T〔輜重隊〕	自動車燃料　薪木炭　モビル配当　輓馬具　部品　馬ノ配当　自転車　現地自活ノ方針　被服補修材料
DTL〔通信隊〕	精白玄籾　改善　副食補給　兵器　通信器材　補給□□品
P〔工兵〕	爆薬　作戦準備　自動貨車　　靴　襦袢　肩当　馬糧
MA〔機関砲隊〕	被服　ミシン　荷車製作　自動貨車教育将校一、下士二
TA〔速射砲隊〕	獣医務下士官(蹄鉄)　自動貨車修業□修学ノモノ入□　索引車教育　モビル　自動車部品　自転車　リヤカー　タイヤ　チューブ　蚊帳　防蚊覆面　糧秣　レントゲンフィルム
MM〔中迫撃砲〕	演習用弾薬 180 キロ　作戦用弾薬弾替　暗号手　倍数教育　通信工手　夜間　蝋燭　乾電池－平射教育ニ使用　観測器材　経理規定　定糧　県指令　ラジオ　ポンプ　新聞
BA〔山砲隊〕	幹候補生 120　50　研究　入換　駄□（砲車用）（迫撃モ同シ）砲□　床板　行李　橇一五門　六〇〇門　磁針用方向鈑　草鞋　援農 ダットサン
506i〔506 連隊〕	駐屯地　道路標識　慰安施設　派遣将校予定　除役処分

505i〔505 連隊〕	民間土蔵借上　軍嘱託トスル件　公用兵　標識ナイモノアリ　証明書各隊　教育連繋　冬季準備ノ編制　副食　調味品（味ソ醤油）　靴　草履　支那ワラジ
504i〔504 連隊〕	見習軍医官　充員外トス　兵器未交付見通シ　自活
4FL	鉄帽

これに対して様々な指示がだされているが、この中で特に注目したいのは「軍紀・逃亡、栄養失調・援農、機動・渡河」である。

まず**軍紀・逃亡**について。宮崎周一中将の日誌（20年７月25日付）には次のように書き留められている。第１総軍から「逐次弛緩　離隊逃亡違刑ノ六割ニ達ス」、第２総軍から「離隊－食糧不足」、航空総軍から「特攻隊要員ノ悪質犯罪、半島人ノ徒党離隊」、憲兵隊からは「物欲色欲ニ起因スル犯罪アリ　一般軍隊中散在スル小部隊ニハ軍紀ノ対外上不良ナルモノ少カラス　其主要原因左ノ如シ　離隊　半島、本島出身者大部（約八割）飲酒ニ因ル将校非行＝下級召集将校」[26]の多発が報告されているのである。そして「軍民離間事象＝大部ハ軍側ニ非アリ」と指摘さぜるを得ない状況であった。師団の内実もまさにそのようなものであったのだろう。再召集の古参兵や老新兵に頼らざるを得ない（「備忘録」には「不具」、「個癖者」、「夜尿症患者」の記載もあり）、また物的戦力よりも精神力を重視せざるを得ない陸軍にとって、軍紀の崩壊は震撼する事態であった。内部では私的制裁が繰り返され、そして民間に対しては様々な供出や迷惑が重ねられていったのである。供出の一つに軍用干草があった。７月13日付の資料によると本県に於ける供出量増加事情を「多クノ部隊駐屯スルコトトナリ軍馬頭数モ増加」としている。県の供出量は2万160キロ、勢多郡下では2272キロ割り当てられていた[27]。

次に**栄養失調・援農**についてはどうだろうか。国力の低下、物資の不足、地方労働力の不足などは必然的に部隊の自活を必要とした。軍中央部は農耕に関する自活目標を各部隊に指示し、休耕地、荒地の開墾、耕作を要求した。このために学校の校庭までも耕作地としてしまったところもある。各部隊は直接の作戦に必要な兵器、戦闘資材、築城器材などの自活作業のほか、主食代用品、副食品、炊事用の薪炭などの生活物資の自活作業にも兵力を配当しなければならなかった。さらには国民が戦争そのものへの嫌悪感、軍に対しての不信感などを高めているために、麦刈、田植、農耕、播種などの援農を実施せざるをえなかったのである[28]。

そして**機動・渡河**について。第36軍隷下の第202師団をはじめ各兵団は、決戦のための機動路建設を行ったが、その工事は遅れ、また米軍の激しい空襲をかいくぐって、２週間を目途に攻撃準備陣地にたどり着くのは至難と見積もられた。拘束部隊が沿岸部を守っている間に、機動打撃部隊が戦場まで到達し、統制のある攻撃ができるか否かに作戦の命運はかかっていた。日本の道路事情は悪い。米軍が九十九里浜に上陸した場合は現地を守る第52軍を支援し、相模湾に上陸した場合は第53軍のために、戦場に急行することになっていた。しかし、九十九里浜か相模湾のどちらに向かう場合でも、利根川と江戸川の渡河が大問題であった[29]。

10日から13日にかけて第36軍の司令部演習があった。15日からは巡視、とりわけ20日午前10時から11時30分まで新町移駐の工兵隊、昼をはさんで午後２時から４時30分まで伊勢崎の歩兵第504連隊、午後７時30分から９時50分まで京ヶ島の機関砲隊を回り、21日は本庄の歩兵第506連隊、22日の午後は桂萱村の通信隊、箕輪の山砲隊、23日は安中の歩兵第505連隊を午前中に、午後から福島町(現甘楽町)の速射砲隊、そして沼田に移動して翌日迫撃第202連隊などを巡視している。

18日の部長会報では、教育練成と各隊の現況が報告されたものと思われる。次のようなメモが認められる（表４）。

表４

504	突撃作業　資材　土工具　馬衛生不良　□食 2834 カロリー　脂肪　魚肉の補給　入浴施設
505	移駐ノ件　戦用被服受渡無用　わらじ　2700 カロリー　昼夜□□
506	給養 2920 カロリー　石ケン　補修材料　用紙□　自活体制

この時期、都市部住民の成人摂取カロリーは平均1800キロカロリーに落ち込んでいた。そのうち配給によるものは1400～1200キロカロリーでしかなかった。通常、成人には１日2400キロカロリー（20～40代で重い労働の場合は3400～3550キロカロリー）が必要である。国内の食糧事情は極度に悪化していたため、青葉兵団のような新設部隊は、早期編成部隊に比べて自活実績がなく、副食の取得が困難となり給養維持に苦心していた。ところが各連隊のカロリー数値を見る限りでは、給養が取り立ててひどいわけではない。しかしこれはあくまでも紙の上の話であって、その実情となると、軍隊の身分制度によって天地の差が生じ、その実態はかけ離れたものであったのだろう。「備忘録」には栄養失調や食糧についてたびたび記されるなど、下級兵士にとっては過酷な食糧事情であったものと思われる。

ところで７月16日、大本営陸軍部は対戦車戦闘を重視し次のように示した。「対戦車戦闘ハ一死必砕ノ特攻ニ依ル肉迫攻撃ヲ主体トス」[30]。「備忘録」にも対戦車戦闘に対する記載が多く認められる。6月に兵団司令部から示された「青葉兵団訓練指針（第3号）」にも「肉攻ハ必死体当リニ徹シ確信ヲ有スルニ至ルヘシ」、「我カ兵団ノ戦法ハ肉攻白兵ヲ主トシ爆薬ヲ用ヒ火器ハ至近距

離ニ於テ弓矢程度ニ考ヘ使用シテ遠戦ヲ行ハス短刀的鳶口的使用ニ依リ必中必殺ヲ期スルヲ主眼トシ挺進捨身ノ戦法ヲ案出スヘシ」[31] となっている。

８月に入り４日午前中、団隊長への講話が行われ（表５）、その後８日まで千葉県下で研究演習が行われた。前橋がB29による空襲をうけた５日から６日にかけて、片倉はこの研究演習参加のために不在であったことがわかる。10日には団隊長へ次の指示が行われた（表６）。

表５

一、七月教育ト□□　油断ヲ戒ム

一、部隊逃亡ノ根絶　責任者処分　指導不足　原因探求　□□□

一、援農援給　民家□入　自活ノ　以下不明

一、出張地域ノ制限　Ｄトノ連繋　（四字不明）　Ｄノ世話　思想ノ是正　今日ノ人心反軍　軍神兵　毒薬　之正援農

一、三角宿舎　厩舎　手軽

一、昼ヤ　五字不明

一、防空　ポッツタム

一、入浴　以下不明

（一行不明）
行李衛兵要員教育　師団司令部将校以下ニ訓話ノコト　軍紀観念　下士官以下所持金制限　大正用水工事□　不寝番　□勤ム（使役　私物　上衣）　私物上衣ノ件群馬県庁□－豊岡以下不明　歩兵連隊本部　安中　8/8 野営　505i　小隊教練検閲病院長　逃亡癖　昼間勤務　中隊二十名　助教助手 27 名　速射砲　迫　観測器材□□　磁針方向仮八　以下不明　T 車輌　車輌→橇　「駄馬」→準備　八月七日□□戦訓

表６

ソ連ノ攻撃開始ト神州危機　必勝信念　□□男　神州不滅　作戦準備ノ□□　原子爆弾ト対策　防ゴ　不条件処理、其他□□　人心ノ動揺ト以下不明　副官会同ノ活用物資収集以下不明　□□ノ責任　連絡兵以下不明　軍紀視察　所持金制限　乗車券購入私物　逃亡　服□引率　上衣　戦闘　五字不明　大正用水工事←始末書　迫撃砲　事務敏捷　作戦資材整備　平井□　機動　戦□準備　宿営　道路橋　設営隊　防疫　T 速□　補給　□トノ関係　□其他部隊関係　司令部庁舎宿舎　勤務　充員外者ノ処理二重準備ノ□□指示　松根油　馬□□　保健所　突撃資材　三角兵舎　八月十五日山砲機動演習　水馬演習

そして14日、この日歩兵第506連隊の各中隊は演習のため相馬ヶ原演習場へ夜行軍で出発した。途中、本庄、岩鼻でB29による空襲下を行軍し、高崎を午前２時頃通過していた。すでに高崎の電車通りは火災で焦熱地獄であった。午前５時頃、目的地相馬ヶ原についたがそれは終戦当日の早朝であった[32]。

「備忘録」には団隊長への指示を最後に、敗戦時の所感が続く。

ところで、敗戦時には宮城占拠事件、上野公園占拠部隊の事件、川口放送所占拠事件など不穏の動きがあったが、第202師団の動向にも注意が払われていたようである。「師団長片倉衷少将の日頃の性格、言動から、或は、、、、、との懸念も持たれたのであるが、終戦に決した直後只一度強硬なる意見具申の電報を寄越したのみで、その後の具体的な動きを見せなかった」[33]。これは12日に第11・12方面軍と第36軍司令部に打電した意見具申のことを指しているのであろう。このときの状況を片倉は次のように語っている。

十六日頃、「最後の時に例のいろいろ蹶起したでしょう。いろんな事件が。あの時にぼくのところに来たんですよ。（中略）陸軍省の軍事課の一部と、富士部隊の幕僚の一部が来た。列車準備するから出動してくれって。（中略）もう大詔が喚発されると、陛下のね。この際軽挙妄動をいましめる。お断りするといってそれでぼくは出なかった。（中略）もし私が出れば二〇一師団は出る。二〇一師団が出れば二〇九師団も出たんですよ。これは大変なことでしたよ。情勢がどうなったかわからない。これは非常に大きな問題です。だから私の師団は事故がなかったですよ」。

陸軍省からどなたが来たんですか、との問いに片倉は「極秘事項です。」と答えている。

決起を促した時、「軍旗を焼け」と言って来たんです。軍旗を。ぼくは焼くなと、奉還したんです。あれを焼いたらぼくの部隊は大変だった。（中略）動員書類は焼く準備をして焼かなかった。それがかえってよかったんです」とも語っている[34]。

17日、次のような師団命令[35] を印刷して隷下各部隊に配布、18日から20日、28日から31日にかけて県内駐屯部隊をまわって動揺を抑えている。

第二百二師団命令　　八月十七日前橋
一、師団ハ情勢ノ急転ニ伴ヒ愈々皇軍真姿ノ顕現ヲ強化セントス
二、各部隊長ハ将校以下ノ志気を振作シ操守ヲ堅クシ軽挙妄動ヲ戒ムルト共ニ指揮掌握ヲ的確ナラシメ益々団結ヲ鞏固ニシ軍紀ノ確立ヲ期スヘシ
師団長　片倉　衷

下達法　　印刷配布
配布区分　隷下各部隊
報告先　　36A 12HA

そして22日は「戦争が終結し、開戦の責任は東條だ等、世間が大変に混乱している時、私は用賀にある私邸に東條を訪ねた、すでに女婿（古賀少佐）は割腹して、応接間にその遺骨が安置されてあり、その横に白木の短刀が置かれてあった」[36] という。

25日には第12方面軍司令官に意見具申を打電している[37]。なお、この電文に対しては同方面軍参謀長の指示により通電先の調査が行われた。

受信者　第十二方面軍司令官　発信者　二〇二師団長　発信地　前橋
青葉参電第一三九号
承詔必謹　皇軍姿の顕現に邁進中にして当地は一般

に微動だもせざるも軍全般の統制を即刻大詔の御趣旨に副はしむる為には左の諸件に関し明確なる御処断あるときは軍隊に於ける善後処理等に極めて容易なるものありと思惟せらるるに付特に具申す（以下略）

そして電文の脇には次の筆記が認められる。

通電先を富士小森参謀に照会の結果（参謀長要求に依り調査す）富士部隊も受領しあり上級司令部等へ発電しあるや否や不明なるに付富士部隊に於て調査中尚本電報の回答は富士部隊に於て回答指導せられある由　橋本少尉

とあるように、上級司令部においては、なお不穏な空気を感じていたのであろうか。

片倉は９月に入っても部隊を回り、最後は沼田の迫撃第202連隊であった。そして16日に召集解除となり20日までに部隊のほとんどが復員を完了している。

５．青葉兵団（第202師団）の布陣

それでは片倉文書や自治体史・学校誌などから部隊の県内外移駐を再現しよう（図１、表７）。

師団司令部の移駐

昭和20年４月30日仙台で編成完結。師団長以下幕僚（参謀部・副官部）、兵器部、経理部、軍医部、獣医部からなり、８月15日現在、将校38名、准仕官・下士官60名、兵207名の計305名の人員であった[38]。

司令部は前橋中学校におかれた。敗戦前後の一中学生の日記にこんな記述が見られる。「五月十六日、納部隊の引越しだ。校庭が一面湖のようになる。前中の校庭もいたんだもんだ。（中略）六月十三日、午前中新しく来る部隊のために作業をした（後略）」[39]。納部隊とは本土決戦に備えて東部第38部隊（高崎）で編成された、第81師団隷下の歩兵第173連隊を指すものと思われる。その後、この部隊は沼津方面に移動、かわって青葉兵団司令部が移駐してきた。

当初は前橋市城東国民学校（以下〇〇校）が予定されていたのであろうか。６月３日、師団副官の市村少佐が校舎使用の件で来校しているからである。さらに５日には部隊兵士が防空壕掘りにきているが[40]、本格的駐屯には至らなかった[41]。また６月10日には、敷島校北校舎７教室に[42]、若宮校にも駐屯しているが[43]、司令部の一部なのかは不明である。

片倉師団長が前橋に到着したのは６月21日（履歴書では６月16日）である。以後、復員するまでの10月10日まで前橋中学校に司令部がおかれていた。

なお、参考までに敷島校には青葉部隊移駐前の４月11日から拓部隊（戦車第１師団）[44]の一部が駐屯、前橋市久留万校の「昭和二十年度　当宿直日誌」[45]の５月22日の項には「一、幡部隊へ小黒板　貸与」の記述があり、７月には桃井校の新校舎階上全教室が前橋連隊区司令部の将校・下士官宿舎となっている[46]。

歩兵第504連隊（青葉第30403部隊）の移駐

連隊本部、通信中隊、一部基幹人員は昭和20年４月30日、残部は６月10日に仙台で編成完結。連隊は連隊本部と３個大隊（１個大隊は４個中隊）、機関銃中隊、迫撃砲中隊、歩兵砲中隊、作業中隊、通信中隊、乗馬小隊からなり、８月15日現在、連隊長菅野善吉陸軍中佐以下、将校132名、准士官・下士官332名、兵3896名の総計4360名であった[47]。このほか馬匹779が割り当てられていた[48]。

伊勢崎市とその周辺郡部に部隊の移駐が知らされたのは、５月16日のことである。伊勢崎市長の「卓上日誌」[49]によると、大隊部副官・宮下少尉が来所して、伊勢崎市、勢多郡の大胡町、荒砥村、木瀬村駒形、佐波郡の三郷村、宮郷村、上陽村に3個大隊4000名の移駐を伝えている。２日後の18日午後、大隊部副官の大尉、設営隊長の少尉ほかが来所して市内の具体的配置に言及した。それによると、南校に連隊本部300名、16室使用、北校には通信有線無線16室、茂呂校には機関銃、馬200頭、６月下旬より移駐、殖蓮校には歩兵の移駐、というものであった。おそらくは前後して周辺町村長にも具体的な移駐が伝えられたものと思われる。

移駐に先立って、６月２日に先遣隊が南校、北校[50]、佐波郡豊受校[51]、勢多郡木瀬村永明校[52]に到着している。５月９日に佐波郡三郷校へ部隊の到着という『三郷小の百年』[53]や『伊勢崎市史』[54]の記述は検討する必要がある。

そして６月22日午後10時、軍旗とともに本隊が伊勢崎駅に到着、南校、北校、競馬場に展開、翌日にはさらに茂呂校、殖蓮校に分散移駐した。

すでに記したが、連隊本部は南校に、３個大隊の各大隊本部は、茂呂校、木瀬村駒形校[55]などにおかれた。伊勢崎市内の４つの国民学校、佐波郡下の５つの国民学校、勢多郡下でも７つの国民学校へ、あわせて16校に連隊将兵が中隊単位で移駐し、さらに周辺のお寺や神社なども使用されたのであった。

なお、勢多郡下川渕校にも敗戦前から学校の講堂へ青葉部隊が宿泊していた[56]が、歩兵第504連隊の将兵かどうかは不明である。ただし学校の所在地から考えるとその可能性は否定できない。

歩兵第505連隊（青葉第30404部隊）の移駐

会津若松で編成された歩兵第505連隊は、８月15日現在、連隊長中山佐武郎陸軍中佐以下、将校128名、准士官・下士官343名、兵3814名の総計4285名であった。馬匹は779である。

安中地域に部隊の移駐が知らされた日時は今のところ

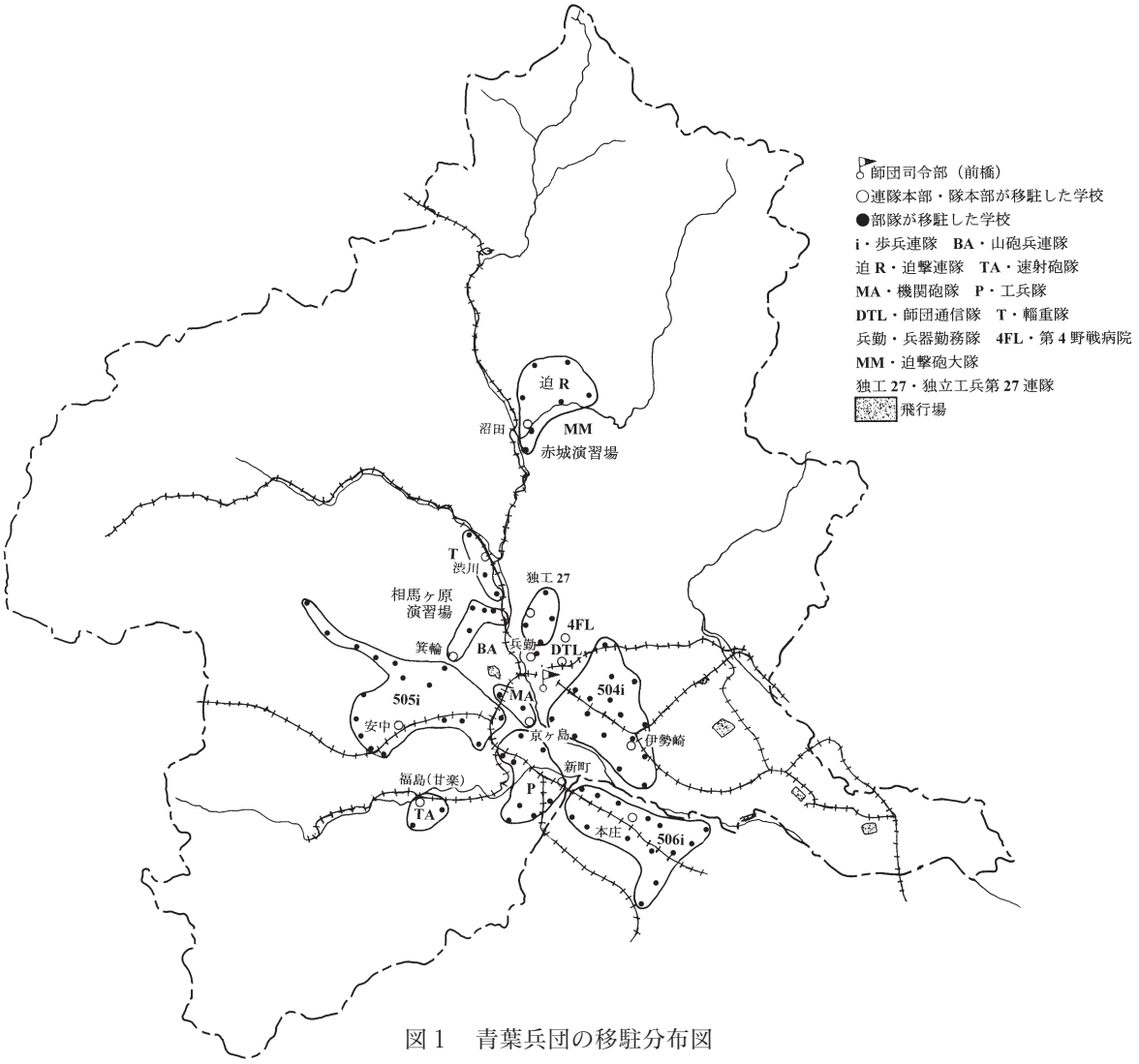

図１　青葉兵団の移駐分布図

明らかでないが、おそらくは歩兵第504連隊と同様に５月中旬のことと思われる。

碓氷郡坂本校では４月、青葉部隊駐留のために校舎の一部を提供したとあるが[57]、これは納部隊の可能性がある。確実なところでは、群馬郡車郷校に５月から歩兵砲中隊約100名くらいが起居していたことと[58]、６月２日に青葉部隊の島貫隊150名が碓氷郡磯部校[59]へ、同日鬼沢隊約400名が群馬郡里見校[60]へ、そして６月10日現在、碓氷郡東横野校[61]や同月初旬に群馬郡久留馬校にも移駐していること[62]、また同郡倉田村三ノ倉校を宿舎として約40名の兵士が薪炭の生産に従事[63]、同村権田校では５月27日に３教室を軍へ供出するための補強工事を実施している[64]。さらに高崎市内の片岡と塚沢の両校にも部隊の移駐が判明しているが、詳細は不明である[65・66]。

連隊本部は碓氷郡安中校におかれたが[67]、大隊本部は今のところ不明である。現在のところ碓氷郡内の５校と群馬郡内の６校、高崎市内の２校で部隊の移駐を確認できるが、これだけでは連隊将兵全員を収容することは不可能であったものと思われる。表７で示した、碓氷郡内８校、群馬郡内８校、高崎市内２校の計18校に分散移駐した可能性が高い。

磯部校では講堂下３教室、講堂東上２教室、下２教室、南物置（炊事）、南農場（馬つなぎ）を、東横野校では旧校舎59坪５合（２室７分）、前校舎100坪（１室20坪、５室）を、碓氷郡八幡校では南校舎に納部隊の騎兵１個中隊が入ったが、終戦直前に移動し、代わって青葉部隊１個中隊が入り、校庭に馬屋が建てられた[68]。同郡豊岡校では20年４月22日早朝に駐屯していた部隊が静岡方面に移動した。変わって新潟方面から来た兵隊が駐屯して訓練をしていたが[69]、これも納部隊から青葉部隊へと変わったことを指しているのであろう。里見校では８教室を部隊に貸与している。群馬郡室田校（６月26日から吹田隊）では校庭に炊事場などがつくられた[70]。

歩兵第506連隊（青葉第30405部隊）の移駐

山形で編成された歩兵第506連隊は、８月15日現在、

表7

青葉兵団（陸軍第202師団）の移駐	部隊名	先遣隊	本隊	校舎・校庭の使用状況など	兵隊の様子など	学校側の対応など	子どもたちの反応	文献
師団司令部（前橋市内、305名）								
前橋中学校（現県立前橋高等学校）	司令部		6月13日以降		5月16日納部隊引っ越し			39
城東国民学校（現前橋市立城東小学校）		6月3日		防空壕、不使用	6月24日陸軍第5技術研究所			40.41
敷島国民学校（現前橋市立敷島小学校）		6月10日		北校舎7教室	4月11日戦車第1師団（拓部隊）150名			42
若宮国民学校（現前橋市立若宮小学校）								43
桃井国民学校（現前橋市立桃井小学校）	前橋連隊区司令部		7月～	校舎階上全教室宿舎				46
歩兵第504連隊（青葉第30403部隊、4360名）								
伊勢崎市内								
南国民学校（現伊勢崎市立南小学校）	連隊本部	6月2日	6月22日～	第3校舎、工作室、16室、壕	行動は厳正、5月10日拓部隊			49
北国民学校（現伊勢崎市立北小学校）	通信中隊	6月2日	6月22日～	16室	5月10日拓部隊	8月14日～15日の空襲で焼失		49
茂呂国民学校（現伊勢崎市立茂呂小学校）	大隊本部、機関銃（中隊）、馬（乗馬小隊か）		6月23日～	南校舎半分、講堂、校庭さつまいも畑	年老いた兵が多かった		炊事当番の兵隊の手伝い	49
殖蓮国民学校（現伊勢崎市立殖蓮小学校）	歩兵（歩兵砲中隊か）		6月23日～	校庭周囲の桜の木、切り倒される？		分散授業		49
退魔寺								
佐波郡内								
豊受村国民学校（現伊勢崎市立豊受小学校）		6月2日				二部授業		51
名和村国民学校（現伊勢崎市立名和小学校）			6月	裏校舎2階、講堂、たこ壺			飼料のための下草提供	
三郷村国民学校（現伊勢崎市立三郷小学校）		5月9日？		厩舎、校庭の一部畑	援農、権現山で訓練			53
宮郷村国民学校（現伊勢崎市立宮郷小学校）								49
上陽村国民学校（現玉村町立上陽小学校）								49
飯玉神社・雷電神社								
勢多郡内								
大胡町国民学校（現前橋市立大胡小学校）								49
木瀬村駒形国民学校（現前橋市立駒形小学校）	大隊本部					分散授業（事務所・社務所・市場）		55
木瀬村永明国民学校（現前橋市立永明小学校）		6月2日				分散授業（浄土院・満福寺など）		52
木瀬村笂井国民学校（現前橋市立笂井小学校）			6月	校庭に高射砲と探照灯？		分散授業（蚕室・集会所・寺など）	寂しさを覚えた	
荒砥村北国民学校（現前橋市立荒子小学校）				教室		分散授業（蚕室など）		
荒砥村北国民学校分校（現前橋市立大室小学校）						分散授業（最善寺・観昌寺・湯清寺）		
荒砥村南国民学校（現前橋市立二之宮小学校）					戦車の爆破訓練		挙手をして登下校	
下川渕村国民学校（現前橋市立下川渕小学校）	？		敗戦前	講堂				56
歩兵第505連隊（青葉第30403部隊、4285名）								
碓氷郡内								
安中町国民学校（現安中市立安中小学校）	連隊本部							47
磯部町国民学校（現安中市立磯部小学校）	島貫隊（150名）	6月2日		7教室、南物置、南農場				59
東横野村国民学校（現安中市立東横野小学校）		6月10日以前		7教室				61
八幡村国民学校（現高崎市立八幡小学校）	1個中隊				老兵、服装・武器貧弱、飢え、5月納部隊騎兵1個中隊	分散授業（寺・神社・民家・炭坑）		68
豊岡村国民学校（現高崎市立豊岡小学校）					4月22日静岡方面に移動は納部隊か			69
原市町国民学校（現安中市立原市小学校）	可能性あり							
後閑村国民学校（現安中市立後閑小学校）	可能性あり							
秋間村国民学校（現安中市立秋間小学校）	可能性あり							
坂本町国民学校（現安中市立坂本小学校）	？	4月？			装備、食事が悪い、納部隊か			57
群馬郡内								
里見村国民学校（現高崎市立里見小学校）	鬼沢隊（約400名）	6月2日		8教室、防空壕	烏河原で演習、援農、水筒20個位			60
車郷村国民学校（現高崎市立車郷小学校）	歩兵砲中隊（約100名）	5月～		3～4教室				58
久留馬村国民学校（現高崎市立久留馬小学校）		6月初旬			装備貧弱、援農			62
室田町室田国民学校（現高崎市立下室田小学校）	吹田隊	20名	6月26日～	校庭に炊事場				70
室田町中室田国民学校（現高崎市立中室田小学校）	可能性あり							
室田町上室田小学校（現高崎市立上室田小学校）	可能性あり							
倉田村三ノ倉国民学校（現高崎市立倉渕東小学校）	約40名		6月		薪炭の生産			63
倉田村権田国民学校（高崎市立倉渕中央小学校）						5月27日、3教室供出のため補強		64
高崎市								
片岡国民学校（現高崎市立片岡小学校）	？				観音山に壕掘削			65
塚沢国民学校（現高崎市立塚沢小学校）	？			北校舎	8月14日校舎戦災、中川村国民学校に移駐			66
歩兵第506連隊（青葉第30405部隊、4291名）								
児玉郡内								
本庄町本庄国民学校（現本庄市本庄西小学校）	連隊本部（150名程度）	6月2日161名	6月24日～	4教室	装備劣悪、老兵、コーリャン飯	二部授業		74
藤田村国民学校（現本庄市立藤田小学校）		6月4日				二部授業		72
仁手村国民学校（現本庄市立仁手小学校）		2月4日16名？	2月22日？	教室の半ば使用		二部授業		79
旭村国民学校（現本庄市立旭小学校）						二部授業		73
北泉村国民学校（現本庄市立北泉小学校）				4教室、防空壕		二部授業		77
神保原村国民学校（現上里町立神保原小学校）				校舎半分、竪穴		二部授業	軍馬の餌の乾し草刈り	78
七本木村国民学校（現上里町立七本木小学校）						二部授業	兵隊の残した悪い面	134
長幡村国民学校（現上里町立長幡小学校）	可能性あり							
賀美村国民学校（現上里町立賀美小学校）	可能性あり							
大里郡内								
本郷村国民学校（現深谷市立本郷小学校）	歩兵砲中隊（加藤部隊250名）			南・中校舎、校庭甘藷栽培				76
榛沢村国民学校（現深谷市立榛沢小学校）				道場、西校舎、東校舎1室、防空壕				80
岡部村国民学校（現深谷市立岡部小学校）	第9中隊（佐藤部隊）		6月	西側3教室				75
中瀬村国民学校（現深谷市立豊里小学校）								71
大寄村国民学校（現深谷市立大寄小学校）				高学年の教室		分散授業（神社）		81
用土村国民学校（現寄居町立用土小学校）								71

青葉兵団(陸軍第202師団)の移駐	部隊名	先遣隊	本隊	校舎・校庭の使用状況など	兵隊の様子など	学校側の対応など	子どもたちの反応	文献
山砲兵第202連隊(青葉第22871部隊、2427名)								
群馬郡内								
箕輪町国民学校(現高崎市立箕輪小学校)	連隊本部							47
桃井村国民学校(現榛東村立北小学校)	可能性あり			裏校舎と講堂	昭和19年7月～第81師団歩兵第173連隊(納2878)	二部授業		85
相馬村国民学校(現榛東村立南小学校)				校舎1/3～半分	装備貧弱、ヤセた馬、粗末な食事、戦車体当たり訓練		恐れと不安	82
駒寄村国民学校(現吉岡町立駒寄小学校)	坂本部隊	2月、3月？		上下4教室、講堂、村営住宅、校庭作付け	警備、防空壕の構築、防空監視、庭に藁人形	分散授業(長松寺)	会話に苦労	83
明治村国民学校(現吉岡町立明治小学校)				8教室		分散授業(神社など)と二部授業	馬の乾し草、兵隊がこづかれて	84
迫撃202連隊(青葉第30406部隊、1637名)								
利根郡内								
利根農林学校(現県立利根実業高等学校)	連隊本部							47
利南村升形国民学校(現沼田市立升形小学校)	150名	6月17日～						87
利南村東国民学校(現沼田市立利南東小学校)	可能性あり					校舎屋根を迷彩色		91
池田村国民学校(現沼田市立池田小学校)	高橋隊(150名)	6月～		講堂、校庭に畜舎(馬匹約40)	野荒らし		兵馬の食糧供出	88
薄根村役場	大隊本部							86
薄根村国民学校(現沼田市立薄根小学校)	松井隊							86
白沢村国民学校(現沼田市立白沢小学校)								86
久呂保村国民学校(現昭和村立南小学校)	迫撃第3中隊(江口隊)	6月17日～	6月26日～	厩20棟	赤城演習場で教練、7月2回援農		兵馬の食糧供出	86.89
川場村国民学校(現川場村立川場小学校)				第2校舎	校庭で大砲を載せた砲車、草鞋履き	二部授業	訓練を目を輝かせて見物	90
別所の観音様								
師団速射砲隊８青葉第30407部隊、481名)								
北甘楽郡内								
福島町国民学校(現甘楽町立福島小学校)	隊本部							47
小幡町国民学校(現甘楽町立小幡小学校)	可能性あり		6月～	西校舎				92
新屋村国民学校(現甘楽町立新屋小学校)	可能性あり							
師団機関砲隊(青葉第30408部隊、334名)								
群馬郡内								
京ヶ島村国民学校(現高崎市立京ヶ島小学校)	隊本部	5月～		8教室				93
東村国民学校(現前橋市立東小学校)			4月？	西校舎、東校舎の裁縫室	校舎に高射機関銃(高射機関砲か)	二部授業から分散授業(神社など)		94
中川村国民学校(現高崎市立中川小学校)					脱走者	西校舎出入り禁止		95
						二部授業		
師団工兵隊(青葉第30409部隊、996名)								
多野郡内								
新町国民学校(現高崎市立新町第一小学校)	隊本部			校舎東半分		二部授業		96
藤岡町国民学校(現藤岡市立藤岡第一小学校)					昭和20年8月18日～晴4101部隊	二部授業		98
神流村国民学校(現藤岡市立神流小学校)				二階建校舎		二部授業		98
美土里村国民学校(現藤岡市立美土里小学校)								98
平井村国民学校(現藤岡市立平井小学校)								98
群馬郡内								
滝川村国民学校(現高崎市立滝川小学校)	2個小隊			裏校舎8教室、校庭に蛸壺壕、防空壕		分散授業		97
倉賀野町国民学校(現高崎市立倉賀野小学校)	？			校舎東半分		分散授業		101
大類村国民学校(現高崎市立大類小学校)	？			東校舎、校庭に壕		二部授業・分散授業		100
佐野村国民学校(現高崎市立佐野小学校)	？			東校舎、本校舎の一部		二部授業・分散授業		99
師団通信隊(青葉第30410部隊、300名)								
勢多郡内								
桂萱村国民学校(現前橋市立桂萱小学校)	隊本部		6月～					103
師団輜重隊(青葉第30411部隊、431名)								
群馬郡内								
渋川町国民学校(現渋川市率北小学校)	隊本部	6月2日	6月16日～	新校舎、新々校舎	老兵、装備貧弱、コーリャン飯	二部授業・分散授業		105
古巻村国民学校(現渋川市立古巻小学校)			6月	6教室			教育環境最悪	107
豊秋村国民学校(現渋川市立豊秋小学校)	柏隊			講堂、3教室、庭に炊事場、タコツボ	櫓を使って物資の運搬を行う訓練、制裁、コーリャン飯	二部授業	軍馬の暴走で負傷	108
金島村国民学校(現渋川市立金島小学校)			昭和19年？	移転校舎				109
渋川八幡宮				厩舎、炊事場				106
兵器勤務隊(青葉第30412もしくは21415部隊、113名)								
前橋市内								
敷島国民学校(現前橋市立敷島小学校)	本田隊	7月13日頃	7月18日～					112
第4野戦病院(青葉第30416もしくは21419部隊、203名)								
勢多郡内								
芳賀村国民学校(現前橋市立芳賀小学校)	高橋隊		7月18日～	9室、校庭に炊事場	大正用水工事応援、拓部隊の駐屯			114
迫撃砲第8大隊(富士36376部隊、1458名)			7月23日～					
迫撃砲第9大隊(富士36377部隊、1523名)			7月23日～					
独立工兵第27連隊(幡第13001部隊)								15
勢多郡内								
富士見村原国民学校(現前橋市立原小学校)	連隊本部・強電隊・材料廠		5月下旬～					
富士見村時沢国民学校(現前橋市立時沢小学校)	第1・第2中隊		5月下旬～					
富士見村石井国民学校(現前橋市立石井小学校)	第3・第6中隊		5月下旬～					
南橋村桃川国民学校(現前橋市立桃川小学校)	第4中隊		5月下旬～					
南橋村細井国民学校(現前橋市立細井小学校)	第5中隊		5月下旬～					

連隊長工藤鉄太郎陸軍中佐以下、将校127名、准士官・下士官271名、兵3893名の総計4291名であった。

埼玉県児玉郡本庄町周辺に部隊の移駐が知らされたのは５月10日のことである。しかし連隊将兵全部を郡内に収容できないために、大里郡の本郷村、榛沢村、岡部村、中瀬村、大寄村、用土村の各村にも分散することになった[71]。そして６月２日、先発隊の161名は炊事場、風呂場の設営のために本庄校へ、４日藤田校の南北両寮[72]に、本隊は24日に軍旗と共に本庄駅に到着、児玉郡・大里郡一帯の学校に移駐した[73]。それは児玉郡下の国民学校７（さらに２校に可能性あり）校、大里郡下の国民学校６校の計13校（15校の可能性）に及んだ。歩兵第504連隊、同505連隊とほぼ同一行動であったことがわかる。

ところが『本庄市史』[74]によると、２月４日、児玉郡仁手村に先発隊16名、22日には本隊到着としている。２月の段階では部隊の編成は行われていないので、これは明らかに他の部隊と混同したものであろう。

連隊本部は本庄校の４号館１階の一部４教室を使用、兵員は150名程度であった。同連隊の第９中隊（佐藤部隊）は岡部校の西側３教室を[75]、歩兵砲中隊（加藤部隊二百数十名）は本郷校の南校舎と中校舎を使用した[76]。他の学校を使用した部隊名は不明である。北泉校では２階の校舎４室に駐屯し、校庭には防空壕が掘られた[77]。神保原校では校舎の半分を使用[78]、仁手校でも教室の半ばが宿舎となった[79]。榛沢校では６月21日に道場・西校舎・東校舎一室が貸与され[80]・大寄校では高学年の教室が兵舎となった[81]。

山砲兵第202連隊（青葉第22871部隊）の移駐

仙台で編成された山砲兵第202連隊は、連隊本部、２個大隊、連隊段列からなり、８月15日現在、連隊長齋藤武陸軍少佐以下、将校64名、准士官・下士官164名、兵2199名の総計2427名であった。

連隊本部は群馬郡箕輪校におかれたが、大隊の移駐先はよくわからない。箕輪周辺で見ていくと北東に接して榛東村（当時は群馬郡桃井村と同相馬村）、そして吉岡町（同じく駒寄村と明治村）が所在している。これら群馬郡内の５校に移駐した可能性が高い。

そこで該当する学校誌を見ていくと次のような記述がみられる。まず相馬校では校舎の三分の一程が、兵舎として接収されている[82]。駒寄校には新潟の坂本部隊が駐屯、校舎の東の上下４教室、裏の講堂、その裏の教員住宅が接収され、校庭の西方から五分の一位に甘藷が作付けされてしまった。人数は小隊程度（30人位）だったという。ただし移駐の時期を２月からとしている[83]。明治校では一番北側の二階建て校舎の８教室が使用された[84]。なお、桃井校には昭和19年７月に2878部隊（納部隊）が裏校舎と講堂を兵舎として使用[85]しているが、青葉部隊についての記述は見られない。しかし納部隊は20年の春頃までには移動しているので、その後に青葉部隊の移駐が考えられる。

しかしこれだけでは兵員の収容は不可能であることから、西に広がる相馬ヶ原演習場が利用された。「備忘録」６月27日付にある「洞窟兵舎　三角兵舎　相馬原附近へ作ル」は、このことを指したものであろう。

迫撃第202連隊（青葉30406部隊）の移駐

迫撃第27大隊（宮田正大尉）および迫撃第28大隊（山下智大尉）の２個を基幹として仙台で編成された。連隊は連隊本部と２個大隊、連隊段列、大隊段列からなり、８月15日現在、連隊長楢崎五郎陸軍中佐以下、将校51名、准士官・下士官150名、兵1436名の総計1637名であった。馬匹は821。

先遣隊は６月17日に利根郡利南村や久呂保村に到着している。その時の状況を『村誌久呂保』は次のように伝えている。「昭和二十年六月十七日「先発隊来る」の電話に接し、午後八時頃、役場から提灯を持って岩本駅へ出迎えに行く、併し、岩本駅では下車せず沼田駅下車の連絡あり。東部三〇四〇六部隊（仙台師団管区）は、かくして六月二十六日当地へ一ケ大隊移駐することになった」[86]。

連隊本部は利根農林学校に、大隊本部（大隊長山下大尉）は薄根村役場などにおかれた。そして升形校（150名）[87]、池田校（高橋千秋中尉以下、１個中隊150名）、薄根校（松井隊）、白沢校、久呂保校（迫撃第３中隊江口隊）、川場校に分散移駐することになった。

池田校では講堂が宿舎となり、畜舎は校庭の南側に簡単な枠と柵を急造して造られた。馬匹はおよそ40頭であった[88]。久呂保校では東の山林内へ畜舎用の壕が掘られ、教練は赤城演習場で行われた[89]。川場校は第二校舎に兵隊が宿営、さらに別所の観音様にも同部隊が宿営した[90]。なお、利南村東校では20年６月21日に校舎屋根を迷彩色に塗装している[91]ことから部隊の移駐が考えられる。沼田校は前年の11月22日に第二から第四校舎計26教室など全焼していたために、部隊の移駐はなかった。このように移駐は利根郡内の８校と役場におよんだものと思われる。

師団速射砲隊（青葉第30407部隊）の移駐

山形で編成された速射砲隊は、隊本部、３個中隊、段列1からなり、８月15日現在、隊長浜田信太郎陸軍少佐以下、将校17名、准士官・下士官40名、兵424名の計481名であった。

隊本部は北甘楽郡福島校におかれたものと思われる。隊の規模から考えると、さらに小幡校や新屋校に分散移駐したものであろう。学校誌からは小幡校の「昭和二十年六月、青葉部隊が西校舎を使用する。八月、終戦となり、青葉部隊は引き揚げる」[92]という記述を確認でき

る。

師団機関砲隊（青葉第30408部隊）の移駐

弘前で編成された機関砲隊は、隊本部と３個中隊からなり、８月15日現在、隊長平田孝太郎陸軍大尉以下、将校16名、准士官・下士官50名、兵268名の計334名であった。隊本部は群馬郡京ヶ島校の校舎８教室を使用[93]、他の中隊は位置的関係や装備から判断すると同郡東村や中川村の学校に移駐したものと思われる。東校では「滝川西の校舎全部を青葉部隊の兵舎に提供、人数などは不明であるが（中略）西校舎には高射機関銃（高射機関砲か－筆者）が据えられた。東校舎の裁縫室も青葉部隊の医務室として使用された」[94]。ただし、この時期を４月としているのは誤りであろう。また中川校では脱走者が目撃されていた[95]。

師団工兵隊（青葉第30409部隊）の移駐

仙台で編成された工兵隊は、隊本部、第１から第３中隊（一般工兵中隊）、第４中隊（対戦車中隊）、そして器材小隊からなり、８月15日現在、隊長宮瀬泰陸軍少佐以下、将校30名、准士官・下士官106名、兵860名の総計996名であった。馬匹は76。

多野郡新町校に隊本部がおかれ、校舎の東半分が使われた[96]。さらに群馬郡滝川校には工兵２個小隊が移駐、裏校舎の８教室を使用、裏校庭には蛸壺壕をたくさん掘り、崖渕にも防空壕を掘った。馬は谷を利用して囲っていた[97]。なお、筆者が小学生だった昭和42年までは、崖淵の防空壕を見ることができた。

この２校だけでは兵員の収容は不可能と思われるので、両校に比較的近接している多野郡藤岡校と周辺の神流村・美土里村・平井村の各校[98]、群馬郡下の倉賀野町・佐野村・大類村の各校の校舎が使用された可能性は高い。結果として多野郡５校、群馬郡４校の計９校になるものと思われる。佐野校では東校舎と本校舎の一部に[99]、大類校では平屋建ての東校舎[100]、倉賀野校の部隊名は明らかでないが、校舎東半分に入ってきて兵舎としていた[101]。しかし岩鼻校では部隊の移駐を確認できなかった[102]。

師団通信隊（青葉第30410部隊）の移駐

仙台で編成された通信隊は、有線小隊２、無線小隊２に区分され、８月15日現在、隊長池田照彦陸軍少佐以下、将校６名、准士官・下士官25名、兵269名の総計300名であった。馬匹は36。隊は勢多郡桂萱校に６月から駐屯している[103]。

師団輜重隊（青葉第30411部隊）の移駐

仙台で編成された輜重隊は、隊本部、輓馬中隊、自動車中隊からなり、８月15日現在、隊長沢田熊衛陸軍少佐以下、将校20名、准士官・下士官45名、兵366名の計431名であった。馬匹は227。

先遣隊の到着を『渋川市誌』は４月20日としている。「先遣隊長桜庭庄太郎中尉（沢田部隊副官）以下二〇人が渋川に到着し、本隊の受入れ準備にあたった。五月初旬、本隊が到着して渋川、金島、古巻、豊秋の国民学校（現小学校）校舎の一部に分散駐留した」[104]。しかしこの記述は１ヶ月早すぎる。

実際は６月２日に群馬郡渋川校の南側校舎の一部に設営隊が到着、６月16日には本隊が到着、新校舎、新々校舎は兵舎となった[105]。将校と下士官の一部は渋川八幡宮の社務所に移駐し、社務所の東に厩舎が建てられた。しかし空襲に備えて兵士と軍馬は入沢地内の黒沢・中ッ沢・砂居沢に沿った山麓に野営構築をして分散し、八幡宮境内に炊事場を設備し、分散した各野営地から炊事当番兵がきて炊飯された食缶を２人で肩にかつぎ運んでいた[106]。このほかに同郡古巻校も平屋建校舎６教室が兵舎として使用された[107]。また豊秋校では柏隊が講堂と１階西側２教室と士官室に１室使い、下庭に炊事場が置かれた。そして校庭は練兵の場として使われた[108]。金島校もまた同様であった[109]。

師団兵器勤務隊（青葉第30412もしくは21415部隊）の移駐

昭和20年７月20日臨時動員、編成地は仙台で７月末ころに編成完結と推定されている[110]。隊長の本田熊次陸軍大尉以下、将校３名、准仕官・下士官14名、兵96名の計113名であった。小銃25、試製武器修理車１、自動貨車５、軽修理自動車１組を装備していた。この状況からもわかるように移動兵器修理班として活動したものと思われる。

「備忘録」に「兵器勤務隊動員」のメモが見られるのは７月18日である。その５日前の13日に「青葉部隊二瓶少佐来校、近日中ニ校舎使用ニ付中間報告ニ来校セラル」[111]と前橋市城東校の昭和20年度事務日誌にあることから、同校が兵器勤務隊の兵舎として使用交渉されたものと思われる。しかし市内の敷島校に移駐することになったようである。それは８月28・29日に敷島校長と本田印のある青葉21415部隊長との「保管転換ノ証」「借用証」の資料からそれは明らかである[112]。ただし同校には６月から他部隊が入っていることから、二つの部隊が同居した可能性がある。

師団第４野戦病院（青葉第30416もしくは21419部隊）の移駐

昭和20年６月４日に臨時動員、編成地は山形であるが編成完結日は不詳、移駐先も未記載であり[113]、第36軍司令部では移駐先を把握できていなかったようである。病院は院長の高橋伊一郎軍医少佐以下、将校21名、准仕官・下士官37名、兵145名の計203名であり、この他に乗馬９、輓馬70となっている。

「備忘録」に野戦病院のメモが見られるのは、６月27日と７月７日であり、「手帳２」には７月８日に「4FL」のメモが認められる。第４野戦病院が勢多郡芳賀校に移駐したのは、昭和20年７月18日であった。村長から県

知事・地方事務所長宛に報告された「軍部学校校舎転用ニ関スル件」によると、普通教室７室、特別室１室、その他３階小室１室の合計168坪、校庭に炊事場の新設、使用者数は205名となっている[114]。報告には貸与先として青葉21419部隊高山隊となっているが、高橋隊の誤りであろう。当時の芳賀村長「小林二郎によると芳賀小学校は衛生部隊で、小林家の倉庫に医薬品を貯蔵した」[115] とあることなどからも第4野戦病院の移駐であったことは間違いない。

そしてこの部隊が大正用水工事の応援に動員された部隊である。「備忘録」に「大正用水工事」のメモが見られるのは７月７日からで、18日の部長会報には「大正用水工事視察」、８月４日と10日にもメモが認められる。

工事の応援は農地開発営団の宮下技師と吉田技師が師団司令部のあった前橋中学校を訪ね、中佐参謀に面会して要請したものであった。作業現場は芳賀村地内で、徒歩行軍で工事現場にやって来た。部隊が工事の遂行に熱心に協力した理由を「戦争遂行には国民総動員により食糧の増産確保が、長期戦に必勝の絶対条件であった事、また当時密かな風聞として私語された事は（中略）本土決戦を決意した軍部が、（中略）大正用水幹線水路を、格好な散兵壕として使用する意図があったと噂された事である」[116] と記している。

この時期、国内の食糧事情は極度に逼迫していた。このために軍としても麦刈、田植、農耕、播種などの援農を実施しなければならない状況に追い込まれていたのであろうが、一方で８月４日の「備忘録」には、「今日ノ人心　反軍　軍神兵　毒薬　之正援農」とあるように、軍に対する反感を抑えるための工事応援であったこともわかる。さらに大正用水を散兵壕とする意図はなく、もし仮に使用することを考えたとしてもそれ以前に全軍玉砕の運命を辿っていたであろう。

迫撃砲第８・第９大隊（富士第36376部隊・同第36377部隊）

両大隊の編成地は沼田、その時期は昭和20年８月上旬である。第８大隊は将校34名、准士官・下士官67名、兵1357名の計1458名であり、第９大隊は将校35名、准士官・下士官74名、兵1414名の計1523名であった。短命な部隊のためにその経歴はほとんど不明である。片倉の「手帳２」に迫撃砲大隊が登場するのは７月23日と24日、そして復員する９月である。

６．部隊が移駐した学校の様相

県は昭和20年３月27日に「国民学校教育緊急措置ニ関スル件」を通牒し、分散授業計画の提出を求めた[117]。これは疎開者の収容宿舎、軍隊の移駐或いは工場の疎開場所として校舎を使用するため、さらには空襲による危険を避ける目的などからであった。そして４月からは国民学校初等科（１年生から６年生まで）を除き、むこう１年間、すべての学業は停止となり、生徒は学校工場、軍需工場、軍用施設などへと動員されていった。

それでは部隊が移駐した学校の様相についてまとめてみよう。まず歩兵連隊の場合について記す。１個連隊の規模は4300名前後で馬匹の定数は700を超えていた。連隊将兵を収容するために、少なくとも十数校の校舎利用がなされ、それでも足りないために寺社も利用されている。そして校庭やその周辺に炊事場や厩舎、防空壕が設けられた。また食料確保のために校庭の一部には甘藷などが作付けされた。

伊勢崎周辺地区（歩兵第504連隊）－伊勢崎市内４校、佐波郡下５校、勢多郡下７校（８校の可能性あり）の国民学校校舎の一部が兵舎となつた。連隊本部のおかれた南校では「工場動員であいていた高等科使用の第三校舎及び工作室が宿舎にあてられ（中略）校庭の南よりに壕を掘って万一の際の軍旗その他の保管に備えていた。行動は厳正で授業の行われている校舎への立ち入りは努めてさけていた」[118] という。茂呂校には「南の校舎半分と講堂、それと校庭の半分を兵隊が使用」[119]、さらに退魔寺にも分散駐屯していた。殖蓮校では、移駐に伴って校庭周囲の桜の木が切り倒されたが[120]、その時期を昭和19年９月としている。名和校では、講堂、裏校舎２階、さらに飯玉神社、雷電神社境内が兵舎として使用された。「学校の庭の周囲にはたこ壺が掘られ兵隊が１人づつ這入れるようになっていた。馬も50頭もいて各神社の境内につながれていた」[121]。三郷校では、「厩舎を建て校庭の一部は甘藷畑と化し食料の確保をはかられた」[122]。笂井校の校庭には高射砲がすえられて探照燈が夜空を染めた[123] というが、歩兵連隊には高射砲は装備されていないので記憶に混乱が見られる。

兵隊は「昼間は出兵留守宅の農作業の手伝や権現山等利用した訓練がされていた（三郷校）」[124]、「兵隊さんの訓練で印象にあるのは、竹で造った戦車の爆破訓練である。木製の爆弾をかかえ、戦車の下にもぐる（荒砥村南校）」[125] 訓練などが行われていった。

このように軍隊に学校を占領され、校舎が兵舎の一部と化してしまったことから、学校は幼い子供たちが無邪気に遊びながら学べるところではなくなってしまった。児童は分散して授業を受けることになったのである。

たとえば大隊本部のおかれた駒形校では、下増田事務所、駒形事務所、社務所、市場で、永明校では一部の児童は浄土院、萬福寺その他で、荒砥村北校は蚕室を借用[126]、同分校では最善寺・観昌寺・湯清寺で[127]、笂井校では「一年と六年は裏の二階建六教室の校舎で、三、四、五年は、それぞれ小屋原の井野さん宅の蚕室、同じく長谷戸の布施川さんの裁縫所、小島田の集会所へ移った。二年は（中略）女組が近戸神社の社務所へ、男組が東の安養院の本堂に疎開した」[128] など、お寺を中心にさま

ざまな場所が選定されていった。

子供たちの反応はどうであったのか。「西校門には歩哨兵が立ち、生徒も馴れぬ手つきで挙手をして登下校した（荒砥南校）」、「乗馬姿も凛々しい東方大隊長（少佐）を見て、立派な軍人になろうと憧れを抱きつつ（中略）放課後、家へ帰ってからすぐまた学校へ行き兵隊さん達と遊んでいた。なぜなら普段家では食べられない様な大きな水密桃やスルメ、菓子類などたくさんあって炊事当番の兵隊さんの手伝いをしながらご馳走にありつけたからであった」「青葉隊という若々しい名前に似ず年老いた兵が多かった（以上、茂呂校）」、「飼料がたりなくて河原の山の下草を提供した（名和校）」、「学校を追われて農家の納屋に疎開する羽目になって、子供心にも寂しさを覚えたものです（笂井校）」といった回想が記念誌などに散見される。

安中周辺地区（歩兵第505連隊）－碓氷郡下８校、群馬郡下８校、高崎市内２校の国民学校校舎が兵舎として使用された可能性が高い。里見校の８教室に分宿した将兵は「装備など殆ど持っていない軍隊で寝具や炊事道具まで心配してやるという状態で、毎日烏川原で演習（中略）時には小学校前の欠下山に防空壕を掘る事もあり、又麦の取り入れなどに協力した事もあった。（中略）隊全体で水筒が二十個位しかなかった」[129] というほどの実態であった。これは久留馬校の将兵についてもまったく同様であった[130]。「中隊長は二十才代の若い中尉で、北校舎の中三階にベッドをおいて、寝泊まりしていました。中隊長でもまさに神さまで、児童はおろか、職員でもろくろく顔を見ることがありませんでした。だが兵隊さんは皆老兵で、服装も武器も貧弱を極め、全員に銃剣がいきわたっていませんでした。その銃剣も竹のさやでした。いつも食糧にうえ、風呂にも事かいて、よく農家に食べものと風呂を、もらいに来ていました」。そして教室全部が使えなくなったので「児童は藤塚の旧学校、剣崎のお寺、八幡宮の神楽殿、その他各大字のお寺や民家が教室となりました。中でもひどいのは、鼻高の高崎炭礦の坑（シキ）の中でも、授業がありました。分散授業中でも、男女は別学でした（八幡校）」[131] という、悲惨な状況に追い込まれた。学校への部隊駐屯は戦時中の痛々しい記憶として記されているのである。

本庄周辺地区（歩兵第506連隊）－児玉郡下７（９校の可能性あり）校、大里郡下６校の国民学校校舎の一部が兵舎として使用された。部隊装備は劣悪で兵士１人に小銃１挺（実弾120発付き）、帯剣１振を与える迄にすら至らなかった。さらに薪・麦藁などの燃料、馬鈴薯などの食料、炊事道具や蚊帳、寝具などにいたるまで周辺村々から供出をうけている。たとえば仁手村では６月10日に麦藁・麦稈・藁・薪などの供出、さらに７月24日ころには次の物品が供出されている。薪１戸１束、青竹寸竹30本、馬鈴薯毎戸１貫目、青竹10束（仁手村駐屯部隊使用）、麦稈100束（連隊本部使用）である[132]。コーリャン飯を食べ、年寄りも多くテキパキと動く姿を見る事は少なかったという。

学校の授業は午前と午後に別れた二部授業となった。「学校の周辺に竪穴が掘られ兵隊が機関銃を据えつけて、空を見あげているそばをこわごわと家へ帰った（神保原校）」[133]。そして敗戦、校舎に駐屯していた部隊も玄関前で大声をあげて泣いて解散して行った。「兵隊の残した悪い面は児童の心にも表れて（七本木校）」[134] いたという。

次に山砲兵と迫撃の両連隊は、歩兵連隊の４割から６割ほどの人員規模であったが、部隊の性質上、馬は相当数いたものと思われる。このために軍馬の飼料供出に各村の農業会は努力していた。

箕輪周辺地区（山砲兵第202連隊）－群馬郡下５校の国民学校校舎の一部が兵舎として使用された。相馬校では「鉄砲もロクに持たず、ヤセた馬を引いた兵隊さんが校舎に泊まり込むようになり、我々六年生は、男女百人を超す生徒が、裁縫室に押し込められて授業を受けることになった。（中略）校舎の正面には、一階と二階の羽目板に「米英鬼畜」と、大きなプラカードが掲げられました。又、私達のイメージでは、帝国日本の軍隊は、厳しい軍律の中で、強く、正しく、堂々と潔よいものだと思っていたのですが、行軍演習の最中、倒れた兵士を将校が、何回も蹴りつけるのを見たり、兵士達の食事が、私達の食べていたイモ飯よりも、もっと粗末な物であるのを知ったりして、子供心に、何か、タブーに触れたような、恐れと不安を感じさせられたものでした。」「校庭では毎日戦闘訓練が行われていた。竹かごで作った戦車（タンク）が通ると、伏していた兵隊が爆弾かかえて体当たりするさまが展開された。裏庭の方では銃剣術のかけ声がこだましていた。この軍隊に刺激され勢い生徒に「兵隊さんを見習え」という厳しい訓練が要求されていった」[135]。

次に駒寄校。「６年生男女２組は机を持って東にある長松寺を間借りして、そこで勉強しました。庭には竹槍用の藁人形ができていました。「軍隊の行動は秘密」で、校長先生と隊長が、お話するだけで他の教員とは無交渉だったそうです。（中略）東北出身者が多く、言葉がわからず、会話に苦労しました。」「奇声を発しながら「鬼畜米英」に見たてたわら人形を竹槍でつきさす」訓練が行われていた[136]。

明治校では「偉い人が横になって、毛布にくるまって、兵隊はこずかれて」いたことや「馬がうんと来たので、朝草を刈って、それを乾して乾燥用として、それを学校へ背負っていって（中略）薪取りもやらされた」[137]。

沼田周辺地区（迫撃第202連隊）－利根郡下の県立学校１校と７校の国民学校校舎の一部が兵舎として使用された。部隊が展開した各村の農業会では、部落農事組合を通じて、兵馬の食糧特に野菜飼料などの斡旋供出に努力した。それでも池田村では馬鈴薯、玉蜀黍、甘藷などの野荒しがあって農民は悲鳴をあげたが、決戦下の行動なので我慢していた[138]。一方、部隊では７月中に２回、援農作業に出征兵留守家族へ勤労奉仕している[139]。川場校では二部授業の実施や大きい学年は家庭勤労として仕事の手伝いをするなど勉強も十分にできなかった。校庭には大砲をのせた砲車が並べられ、子どもたちは訓練をした時など目を輝かせて見物していた。兵隊は草履をはいていたという[140]。

最後に渋川周辺地区（師団輜重隊）について見てみよう。群馬郡下４校の国民学校校舎の一部が兵舎として使用された。渋川校の正門には歩哨が昼夜立つようになった。兵士は一般に妻子をもつ年輩者が多く、校庭で若い見習士官の怒号で訓練している様子は哀れさを感じさせたという。装備が貧弱であったことや「偉い人は最期まで銀シャリだったが、兵員はコーリャンだった」ことからも、多くの兵士が苦しい戦陣生活を強いられた。教科書で語られた軍人像とはかけはなれたものが子どもたちに目撃されていた[141]。

豊秋校の兵士は、行幸田の字伊勢の森、空沢他数か所の弾薬貯蔵庫の警備や馬糧の草刈りなどを行っていた[142]。このため付近の農家は家畜に与える草が日増しに窮乏し、近くでの草刈りはできなくなってしまった。校庭では橇を使って物資の運搬を行う訓練がされたり、唐沢川の土手に防空壕や学校付近にタコツボが掘られた。「講堂前で上官が兵卒を制裁しているのをみたことがある、何か怖い印象が残り、ある時は軍馬が校庭を暴走し遊んでいた児童が逃げ遅れ負傷を負ったこともあった。隊の食糧は下庭の炊事場で作られていたが主食は殆どコーリャン飯であった。」[143]。

金島校では引き上げる時、若い少尉が「我々が敗戦で悲しんでいるのに敵国の歌をひくとは何事だ」と大声でどなり、軍刀で廊下の柱を切りつけたという[144]。

以上、これらを通してわかるように、校舎を兵舎として使用された国民学校は、二部授業や分散授業でその対応をせざるを得なかった。それは結果として授業効率を極度に低下させたことは否めず、学校はその教育機能をほとんど失ってしまった。そしてこの体制は強化こそされたが、ついには本来の学校授業の形態に復することなく敗戦を迎えたのである[145]。

７．復員業務と終戦業務

各部隊の復員業務は８月下旬から開始された。そして迫撃砲第８大隊の９月２日を皮切りに、同第９大隊は６日、師団通信隊以外の各部隊は９月14日から９月20日に亘る間に復員を完結した。それを具体的にみると、15日に迫撃第202連隊、16日に歩兵第506連隊、山砲兵第202連隊、輜重隊、17日に機関砲隊、兵器勤務隊、18日に歩兵第505連隊、速射砲隊、工兵隊、19日に第４野戦病院、20日に歩兵第504連隊であった。そして10月10日の師団司令部と同通信隊の復員を最後に、創設以来５ヵ月有余にして師団全部隊の復員を完結した[146]。

師団の保有軍需品などは第36軍の指示に基づき、一部を地方官庁や自治団体などに払い下げを行ったほか、鉄道沿線にあった各部隊本部の所在した県内７ヵ所、埼玉県１ヵ所にそれぞれ集積して整理、連合軍への引渡準備を行った。埼玉地区の分は９月19日に米第43師団に引渡を完了している。師団保有兵器器材中の通信器材の大部は前橋電信電話工事局に、機甲車輛の一部、土工、木工器材、測量器材、鍛工器材、機力器材、爆破資材の一部、雑器材、兵器用資材は群馬県庁にそれぞれ保管転換し、また輜重兵器の大部は群馬県庁をとおして民間に有償払い下げ、一部器材はこれを焼却破棄した。そのほかの兵器器材や自動車類は残置軍需品として各集積地に集積した。県下所在の自動車類は、その大部を渋川に終結して整備を実施した。

衛生材料の個人装備用材料は各人に交付し、部隊装備用や常続用材料は高崎および沼田陸軍病院に保管転換した。

さらに保管馬1214頭中541頭は群馬県庁をとおして民間に払い下げ、そのほかは在営中の希望者に優先払い下げを実施したが、その払い下げ価格は平均277円14銭であった。獣医資材は全保有分を一括して群馬県庁をとおして獣医師会ならびに装蹄師会に有償払い下げを行った。

おわりに

本土決戦下の県内の状況については、これまで詳細な分析は行われてこなかった。今回、片倉衷の「日誌」と「備忘録」から、今まで不明であった県内移駐師団の実態と行動を把握し、あわせて部隊が布陣した県内各地や埼玉県下の国民学校の状況を集約してみた。

その結果、表７から明らかなように、部隊の移駐開始は昭和20年５月中旬以降、６月初旬にかけて実施された。ところが前年９月や20年初頭とする市史や学校誌などもあった。これは昭和19年７月24日に新設された第81師団（納部隊）隷下の歩兵第173連隊や満州から転用された戦車第１師団（拓部隊）隷下の部隊で、これらと混同したものであった。すでに青葉兵団移駐前に学校を兵舎として使用することが始まっていたのである。

青葉兵団の移駐は図１のように鉄道沿線を中心に、当

時の前橋市、高崎市、伊勢崎市、佐波郡５村、勢多郡１町・５村、碓氷郡２町・６村、群馬郡４町・17村、利根郡１町・６村、北甘楽郡２町・１村、多野郡２町３村におよんだ。現在の行政区域では６市３町３村（市－前橋・高崎・伊勢崎・沼田・渋川・安中、町－玉村・吉岡・甘楽、村－榛東・昭和・川場）となり、北は川場村から南は高崎市新町、東は伊勢崎市から西は安中市まで、そして埼玉県下の児玉郡１町・８村（現本庄市・上里町）、大里郡６村（現深谷市・寄居町）の広範囲であった。さらに国民学校で見ると、前橋市２校、伊勢崎市４校、佐波郡５校、勢多郡10校、碓氷郡８校、群馬郡24校、利根郡７校、北甘楽郡３校、多野郡５校の計68校、さらに県立学校２校におよんだ。このために学校は午前と午後に分かれた二部授業や分散授業を実施せざるを得なかった。学校はその教育機能をほとんど失ってしまった。

そして子どもたちが見た部隊の実態を、戦後の回想ではあるが、貴重な証言として紹介した。これらから見えてきたことは、本土決戦師団とは名ばかりで、小銃や銃剣もろくにない貧弱な装備で、陣地構築や自活・援農作業に明け暮れてろくに訓練もできない、さらに周辺の村々からの食糧・馬糧供出に頼らざるを得ない軍隊であった。新兵（老兵）たちの足下を見れば草鞋履き、さらには栄養失調者や逃亡者をだしながらも本土決戦に突き進もうとした。校庭などで実施された訓練から見えてきたことは、物資輸送には橇を使い、兵士一人一人が爆弾を抱えて敵戦車に飛び込む人間爆弾になるだけのことであった。

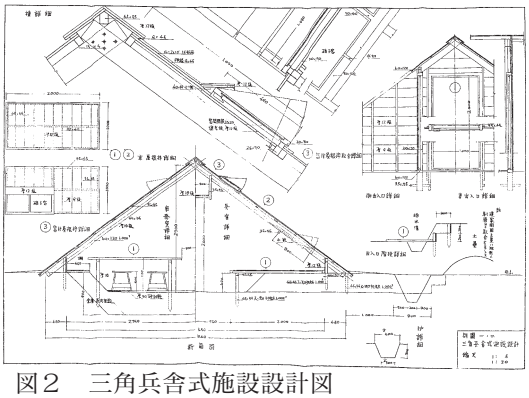

図２　三角兵舎式施設設計図
「戦局に伴フ工事設計規格規制要領」筆者所蔵

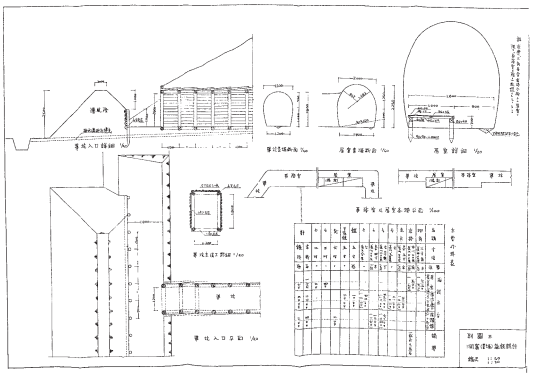

図３　洞窟（素掘）施設設計図
「戦局に伴フ工事設計規格規制要領」筆者所蔵

昭和20年４月20日、大本営陸軍部が配布した『国土決戦教令』の「第十一」には「決戦間傷病者ハ後送セザルヲ本旨トス　負傷者ニ対スル最大ノ戦友道ハ速カニ敵ヲ撃滅スルニ在ルヲ銘肝シ敵撃滅ノ一途ニ邁進スルヲ要ス　戦友ノ看護付添ハ之ヲ認メズ　戦闘間衛生部員ハ第一線ニ進出シテ治療ニ任ズベシ」とある。それに続いて「第十二」では「戦闘中ノ部隊ノ後退ハ之ヲ許サズ」[147]とし、全将兵に「玉砕」を強いるものであった。さらに６月からの国民義勇隊に編入された男性（15歳から60歳）や女性（17歳から40歳）までも、敵戦車に体当たりして自爆することを強制されたであろう。一方、大本営は自己温存を図るために、最後まで松代大本営工事を督促していた。

本土決戦に関連する遺跡－ところで近年注目されている戦争遺跡に本土決戦に関わる遺跡、その中でも陣地壕などの調査がある。紙幅の関係で今回紹介することはできなかったが、県内の遺跡としてはどのような遺構が想定され、そして現在に残されているのであろうか。

まず遺構として想定されるのが、学校の校庭や周辺に構築された人馬用の防空壕、炊事場、浴場、訓練用のタコツボ、さらに三角兵舎（図２）や洞窟兵舎（図３）であろう。たとえば先遣隊が構築した炊事場と浴場についてみるとその基準は次の様になっていた[148]。炊事場の大きさは概ね200～300名を１単位として構築され、長さ21メートル、幅5.5メートルを必要とした（図４）。釜湯調理所30平方メートル、主食釜数３個、副食釜は主食釜数の半数、米麦塩蔬菜庫20平方メートルなどである。浴場（180名に対して）は長さ10.5メートル、幅5.5メートル、浴槽は3.6平方メートルである。

渋川に展開した輜重隊が復員した後には、野営構築壕や、埋葬した軍馬の墓標などが山麓中にしばらく見られたという。それは戦後40年たっても、入沢延命寺平以西の中ツ沢左岸の尾根には、なお厩舎壕の跡がその名残を留めていたという[149]。筆者が小学生だった昭和42年

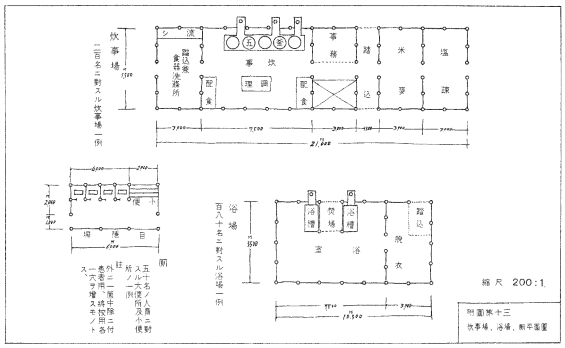

図４　炊事場、浴場、厠平面図
「兵力ニ依ル居住施設構築ノ参考」筆者所蔵

までは、通学した滝川小学校の崖面には防空壕が複数認められた。校舎の増改築時の発掘調査で、炊事場跡や浴場跡、さらに壕などの遺構が検出されることがあるのではないだろうか。また相馬ヶ原演習場や赤城演習場跡周辺には関連する遺構がまだ残されている可能性がありそうである。埼玉県内では実際に発掘された遺跡もある。それは昭和56年金鑽大通り線の予定地発掘調査のおり、無数の径１ｍ前後の円形土坑が確認されたが、これらは青葉部隊が訓練のために掘ったタコツボであった[150)]。

註

1）群馬県　1974　『群馬県復員援護史』p939～941
2）防衛庁防衛研修所戦史室　1971『戦史叢書　本土決戦準備〈1〉－関東の防衛－』p208
3）徳永鹿之助「第三十六軍の復員に関する資料」防衛研究所図書館所蔵
4）片倉衷の「手帖１」から（本文３を参照のこと）。〔　〕内は筆者の注、□は文字不明。
軍令陸甲61号　2/4/20〔20年４月２日〕30/4〔４月30日師団長補職〕15/4〔４月15日歩兵学校付〕10/6〔６月10日主力の編成完結〕
師団司令部 300　馬20
R 〔連隊〕 4500　700頭
連隊本部　三大〔三個大隊〕（大隊本部 4中〔四個中隊〕Mg〔機関銃中隊〕1　L〔迫撃砲中隊〕1）
iA〔歩兵砲中隊〕1
作業〔中隊〕1
通信〔中隊〕1
乗馬小隊１
迫〔迫撃連隊〕1700　馬900
連隊本部　二大〔二個大隊〕（1〔大隊本部〕、三中〔三個中隊〕、段列１）
連段〔連隊段列〕1
速射　500　1〔隊本部〕　三中　段列１
機関砲　350　1〔隊本部〕　三中
P 〔工兵〕 1000　馬80
三中〔一般工兵中隊〕対戦車中隊1　器材〔小隊〕1
通信隊　300　馬30
有線二小〔二小隊〕　無線二小〔二小隊〕
T 〔輜重兵〕　450　馬230
本部　輓馬１中　自動車１中
師団　三iR 〔三個歩兵連隊〕　AR〔野砲兵連隊〕1　迫R〔迫撃連隊〕1　速射砲　機関砲　P〔工兵〕　通信　T〔輜重兵〕　兵勤務×衛生隊×野病３×病馬廠１×計画10/6×
5）2）のp223・224
6）額田担　1999『最後の陸軍省人事局長 額田坦回想録』p172・173
7）松田正雄　1971「本土決戦準備と人事」『大東亜（太平洋）戦争戦史叢書第51冊付録』
8）和田盛哉　2001　「国民総武装の体制」『本土決戦』p36～67
9）「中村大尉事件」とは、1931（昭和６）年６月27日、陸軍参謀中村震太郎大尉と他３名が軍用地誌調査の命を受け、大興安嶺の東側一帯（興安嶺地区立入禁止区域）を密偵していた際、中国張学良配下の関玉衛の指揮する屯墾軍に拘束され、銃殺後に遺体を焼き棄てられた事件のこと。
10）片倉衷　1972　『戦陣随録』などを参照
11）3）に同じ
12）「新設部隊ノ装備充足状況　昭二〇、五、一六　第三課」（市ヶ谷台史料23）防衛研究所図書館所蔵
13）「片倉衷文書 片倉衷履歴書断片」（分類番号2548）国立国会図書館憲政資料室所蔵
14）日本近代史料研究会　1983　『片倉衷氏談話速記録（下）』p267
15）部隊史全般編纂委員会　1985　『独立工兵第二十七連隊』p261～269
16）神谷下諏訪26会同窓会　2004　『まなびや　伊勢崎市立殖蓮小学校昭和23年　殖蓮中学校昭和26年卒業』p11
17）赤堀村誌編纂委員会　1978　『赤堀村誌（下）』p1635
18）三小沿革誌刊行委員会　1975　『第三小学校百年のあゆみ』p31
19）本庄市史編集室　1995　『本庄市史（通史編Ⅲ）』p778
20）渋川市市誌編さん委員会　1991　『渋川市誌　第三巻　通史編・下　近代・現代』p564
21）伊勢崎市　1991　『伊勢崎市史　通史編３　近現代』p469
22）伊勢崎郷土文化協会　1995　『伊勢崎の昭和二十年－市長の「卓上日記」にみる－』p42・43
23）「片倉衷文書　昭和20年５月団隊長会同席上師団長訓示」（分類番号712）、国立国会図書館所蔵
24）「片倉衷文書　青葉兵団教育錬成ニ関スル指示」（分類番号708）、国立国会図書館所蔵
25）宮崎周一　2003　「作戦秘録　下」『大本営陸軍部作戦部長宮崎周一中将日誌』p161、錦正社
26）25）のp186
27）芳賀村誌改訂並びに町誌編纂委員会ほか　2003『芳賀村誌　芳賀の町誌』p356・357
28）2）のp490・491
29）2）のp401
30）2）のp503
31）「片倉衷文書　青葉兵団訓練指針第三号」（分類番号710）、国立国会図書館所蔵
32）逸見八郎　1982　「内地勤務」『燦たり石門幹候隊!－第11期甲種幹部候補生の手記』p146・147
33）参謀本部所蔵　1967　『敗戦の記録』p383、原書房
34）日本近代史料研究会　1983『片倉衷氏談話速記録（下）』p275～277
35）「終戦後ニ於ケル部隊ノ行動ニ関スル綴　東部軍管区司令部」（本土全般77）防衛研究所図書館所蔵
36）片倉衷　1981　『片倉参謀の証言　叛乱と鎮圧』p94、芙蓉書房
37）「終戦後に於ける部隊の行動に関する綴　東部軍管区司令部」（本土全般78）防衛研究所図書館所蔵
38）「片倉衷文書　状況報告　昭和二十年十月十日　第二百二師団」（分類番号694）国立国会図書館憲政資料室。以下、各部隊の将兵数についてはこの資料に基づいている。
39）前橋高等学校校史編さん委員会　1983　『前橋高校百三年史　下巻』p1179
40）前橋市教育史編さん委員会　1986　『前橋市教育史　上巻』p1237
41）城東小学校　1977　『城東小五十年のあゆみ』p35
42）前橋市史編さん委員会　1984　『前橋市史　第五巻』p268
43）前橋市立若宮小学校　1985　『開校五十周年記念誌わかみや』p48
44）40）に同じ
45）前橋市久留万国民学校「昭和二十年度　当宿直日誌」前橋市教育研究所所蔵
46）前橋市桃井小学校創立百三十周年記念事業委員会　2002　『桃の花』p65。このほかに前橋市立桃井小学校PTA厩橋桃井小学校同窓会　1967　『桃井校沿革余話』p36
47）38）に同じ
48）2）の付表第三。以下、各部隊の馬匹についてはこの資料に基づいている。
49）伊勢崎郷土文化協会　1995　『伊勢崎の昭和二十年－市長の「卓上日記」にみる－』p42・43、48
50）49）のp48
51）伊勢崎市　1991『伊勢崎市史　通史編３　近現代』p469
52）永明小学校百周年記念事業協賛会　1975　『永明学校沿革誌・永明町村誌』p13
53）三郷小学校百年誌編集委員会　1975　『三郷小の百年』p21
54）51）に同じ
55）前橋市立駒形小学校百年誌編集委員会　1974　『百年誌』p72
56）下川渕村誌編纂委員会　1958　『下川渕村誌』p486
57）18）に同じ
58）車郷小学校開校100周年記念事業実行委員会　2003　『わが母校100年のあゆみ』p21

59）安中市市史刊行委員会　2000　『安中市史　第一巻　近代現代資料編２』p46
60）里見村誌編纂委員会　1960　『里見村誌　下巻』p899
61）東横野村誌編纂委員会　1984　『群馬県碓氷郡東横野村誌』p307
62）久留馬村誌編纂委員会　1963　『久留馬村誌』p187
63）倉渕村誌編さん委員会　2009　『新編　倉渕村誌　第四巻　通史編』p563
64）中央小開校記念事業実施委員会校誌編さん部会　1991　『倉渕中央小百十年の歩み』p227
65）高崎市立片岡小学校　1985　『片岡小学校百十年のあゆみ』p189
66）高崎市立塚沢小学校百年史編纂委員会　1977　『塚沢小学校百年史』p67
67）安中市市史刊行委員会 2003 『安中市史　第二巻　通史編』p790
68）高崎市立八幡小学校校史発行委員会　1977　『高崎市立八幡小学校のあゆみ』p95～97
69）「豊岡誌」編さん委員会　2007　『群馬県高崎市『豊岡誌』』p96、246
70）室田町誌編集委員会　1966　『室田町誌』p520
71）32）に同じ
72）本庄市史編集室　1995　『本庄市史（通史編Ⅲ）本庄市歴史年表』p167
73）本庄市史編集室　1995　『本庄市史（通史編Ⅲ）』p775～777
74）73）p778
75）岡部町立岡部小学校開校百年記念事業協賛会　1989　『開講百周年記念誌おかべ小』p52
76）本郷小学校開校百年記念事業協賛会　1988　『開校百周年記念誌』p64
77）本庄市立北泉小学校開校百年記念事業実行委員会　1974　『開校百年のあゆみ』p31
78）神保原小学校開校百年記念事業実行委員会　1987　『開校百年誌』p131・132
79）仁手小学校開校百周年記念事業実行委員会　1993　『仁手小学校開校百周年記念誌』p104
80）岡部町立榛沢小学校開校百年記念事業協賛会　1988　『開校百年記念誌』p51
81）開校百周年記念事業記念誌委員会　1988　『おおより』p57
82）相馬小学校百周年記念事業実行委員会　1975　『相馬小学校百年史』p131～143
83）駒寄小学校開校百周年記念事業実行委員会　1985　『駒寄小学校百周年記念史』p107～113
84）明治小学校百年史作成委員会　1985　『明治小学校百周年記念史』p231～234
85）桃井小学校開校百周年記念事業実行委員会　1976　『桃井小学校百年史』p159
86）久呂保村誌編纂委員会　1961　『村誌久呂保』p687・688　一方、次のような記述もある。「五月四日、私は青葉師団の先発隊となり、群馬県利根郡に移駐した。わが迫撃第三中隊（江口隊）は久呂保村小学校に屯営を設けた。半地下式の厩が山の中腹に二十棟設営されて馬匹は空襲から守られることになった。（陸軍習志野学校史編纂委員会 1987　『陸軍習志野学校』p469）
87）沼田市立升形小学校開校百年記念事業推進委員会　1974　『開校百年記念誌』p27
88）池田村史編纂委員会　1964　『池田村史』p441～443
89）86）に同じ
90）川場小学校開校百年のあゆみ編集委員　1974　『川場小学校百年のあゆみ』p84～89
91）沼田市史編さん委員会　2002　『沼田市史　通史編３　近代現代』p527
92）甘楽町史編さん委員会　1979　『甘楽町史』p1175
93）京ヶ島村誌編纂委員会　1961　『京ヶ島村誌』p187
94）東村誌編纂委員会　1959　『東村々誌』p238
95）中川小学校百年史委員会　1979　『高崎市立中川小学校百年史』p193～195
96）新町小学校百年史編集委員会　1975　『新町小学校百年史』p99
97）滝川小学校百十年史編集委員会　1984　『滝川小学校百十年史』p90・91
98）藤岡市教育史編さん委員会　1978　『藤岡教育百年のあゆみ』p57・58、186
99）高崎市立佐野小学校　1974　『佐野小学校百年のあゆみ』p239、246
100）大類小学校史編纂委員会　1997　『大類小学校史』p233・234、273・274
101）倉賀野小学校開校百年記念事業実行委員会　1978　『倉賀野小学校百年史』p166
102）岩鼻村国民学校　1945　「昭和二十年度　当直日誌」高崎市立岩鼻小学校所蔵
103）前橋市立桂萱小学校　1974　『桂萱小学校沿革誌』p43。この他に、桂萱地区自治会連合会　2006　『桂萱村誌』p433
104）渋川市市誌編さん委員会　1991　『渋川市誌　第三巻　通史編下　近代・現代』p564
105）渋川北小百年史編纂委員会　1973　『渋川北小百年史』p509
106）104）p564
107）渋川市立古巻小学校創立百周年記念事業実行委員会　1976　『古巻小学校百年の歩み』p205
108）渋川市立豊秋小学校創立百周年記念事業実行委員会　1975　『小学校百年の歩み』p159～161や行幸田百周年記念事業実行委員会 1995　『行幸田百年の歩み』p448
109）金島小学校創立百周年記念事業実行委員会　1973　『金島小学校百年のあゆみ』p32、40
110）48）に同じ　111）40）に同じ
112）「昭和二十年度　教務関係書類　敷島国民学校」「昭和二十年度日直簿」前橋市教育研究所所蔵
113）2）付表第一・三
114）芳賀小学校　1974　『芳賀小学校百年誌』p32・33
115）丑木幸男編　1983　『大正用水史』p133
116）115）に同じ
117）群馬県教育史研究編さん委員会　1975　『群馬県教育史　第四巻（昭和編）』p263～265
118）南小学校50周年記念誌刊行委員会　1980 『南小五十年のあゆみ』p48
119）茂呂小学校百年史編集委員会　1974　『茂呂小学校百年史』p40～43
120）16）に同じ
121）名和小学校百年誌編集委員会　1979　『名和小百年』p34、104
122）三郷小学校百年誌編集委員会　1975　『三郷小の百年』p64
123）前橋市笂井小学校　1974　『笂井小学校百年誌』p123
124）122）に同じ
125）二之宮小学校創立百周年事業実行委員会　1974　『百年のあゆみ』p163
126）荒子小学校百周年記念誌編集委員会　1974　『あゆみ－荒子小の百年－』p81～84
127）前橋市立大室小学校　1978　『おおむろ百年のあゆみ』p25、120
128）木瀬村誌編纂委員会　1995　『木瀬村誌』p206・207
129）60）に同じ　130）62）に同じ
131）高崎市立八幡小学校校史発行委員会　1977　『高崎市立八幡小学校のあゆみ』p95～97
132）19）p778・779　133）78）に同じ
134）七本木小学校記念誌発刊実行委員会　1976 『七小記念誌』p127～129
135）82）に同じ　136）83）に同じ　137）84）に同じ
138）88）に同じ　139）86）に同じ　140）90）に同じ
141）105）p497・498
142）行幸田百周年記念事業実行委員会　1995　『行幸田百年の歩み』p448、106）p564
143）108）に同じ　（144）109）p40　145）117）に同じ
146）38）に同じ　147）2）p337
148）陸軍省「兵力ニ依ル居住施設構築ノ参考」筆者所蔵。「設計参考」として綴られた冊子群には上記資料のほかに「昭和二十年度陸軍需品補給品種及単価決定ノ件通牒」「戦局ニ伴フ工事設計規格規制要領」「地下工場建設指導要領案　昭和20年２月　技術院・陸軍省」もあることから、昭和20年発行と思われる。
149）20）p565　150）19）p780

このほかに保阪正康『本土決戦幻想　コロネット作戦編』毎日新聞社、2009年、樋口隆晴「一撃講和に賭けた本土決戦計画」『本土決戦』学習研究社などを参考とした。